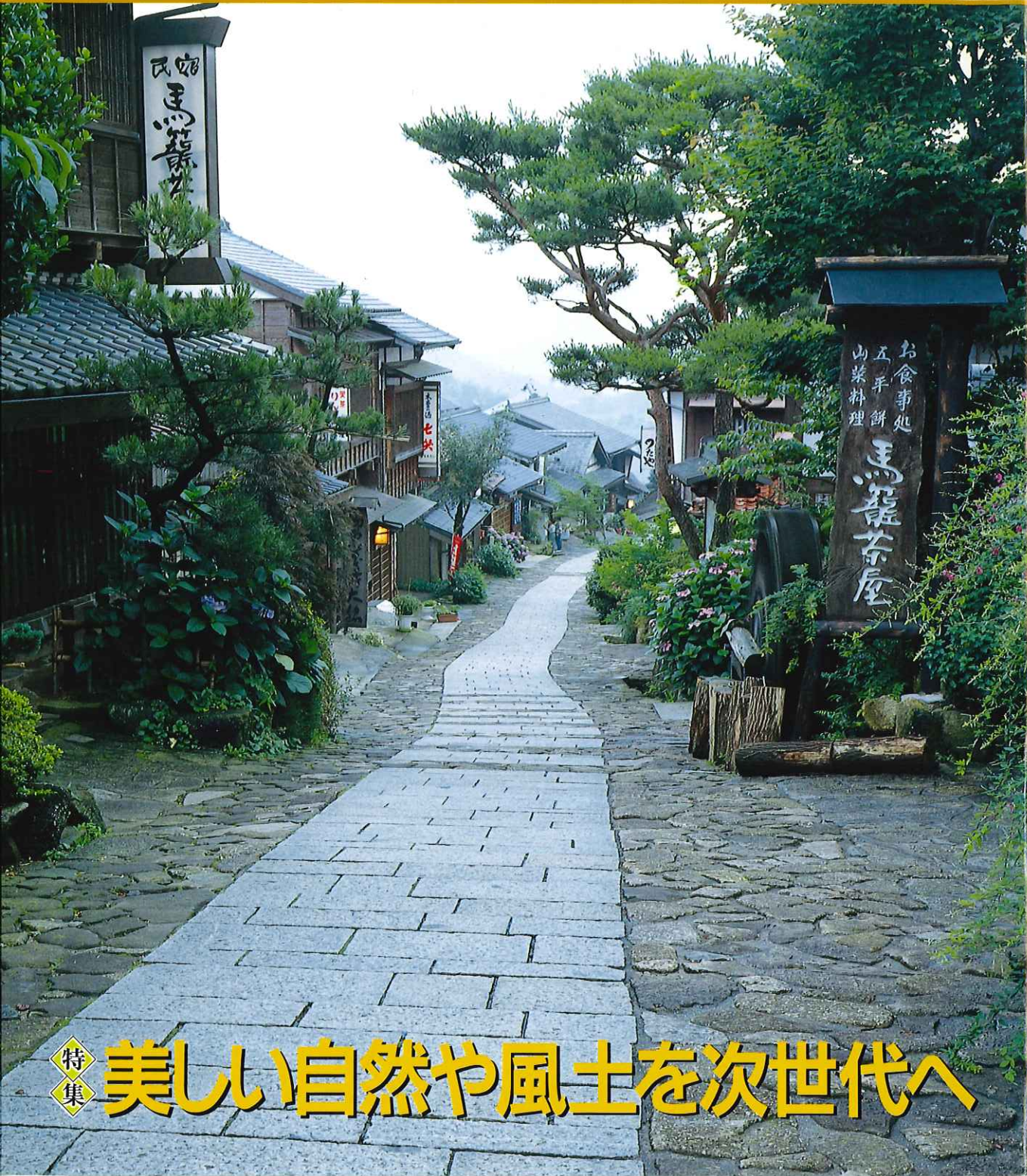


[De POLA] 地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でぽら

8

'95春夏号



特集 美しい自然や風土を次世代へ

特集 美しい自然や風土を 次世代へ

■フォトエッセイ 棚田を未来へ——3

①自然景観・環境を守る

「町並み保存」は「町づくり」の第一歩/内子町——7

古い町並みを暮らしと共に/上下町——10

茅葺民家の里・保存——14~17

京都府美山町[茅葺の里] 富山県平村[相倉合掌集落]

白川郷・五箇山の合掌造り集落



②人々の英知とユニークな施設で

高齢者が主役の町づくり——18

福祉と観光の町/足助町

人と文化が会おう郷——21

壮大なロマンを実現する/利賀村

■町並み保存の先進地、いま昔——24~26

「馬籠和らかなり」を目標に/保存憲章を制定して20年・馬籠宿
宿場再現に土産店も自主規制・妻籠宿

③森と水を守る——27~29

森は海の恋人。海と山の住民が森づくり
を通じて交流/牡蠣の森を慕う会(唐桑)
重茂半島漁民の“森の生活”

●環境保全へ向けて——33~35

産廃物処分をめぐる問題/
ゴミをリサイクルして有効利用



「でほら」(DePOLA)とは
Depopulated Local
Authorities (人口が少な
い地域)、つまり過疎地域の意
味。わが国の過疎市町村は
37%にも達しています。貴重
な自然環境と農産物の供給地
であり、日本の伝統文化や風
土を伝承してきた農山漁村の
活性化と発展をめざすための
交流誌として『でほら』をお
届けいたします。

●表紙/初夏の馬籠宿
上は、民宿のおばあさん手づ
くりのワラ人形。

■でほら・エッセイ

魅力ある田舎をつくる 森戸 哲——12

■都市からふるさとへのメッセージ

気まぐれな都会人の「旅」をどう捉える？

「ふるさと体験ツアー」の試み/ふるさと情報センター——30

■フォト・ルポ

豊かな島を返して/産廃物不法投棄と闘う豊島——36

INFORMATION/各地の茅葺の里——39



▲茶畑と棚田が織りなす“農の美”。福岡県星野村



斜面を階段状に開墾し、石垣を施した棚田は、日本の山間地の至るところで見受けられる。急峻な斜面にしがみつくように築かれた数枚の田んぼ。文字どおり、山肌を「耕して天まで至る」壮大な千枚田。人工の建造物でありながら、自然ともみごとに調和するその景観は、「ムラ」の原風景として見る者の心を和ませる。

棚田を未来へ

■フォト・エッセイ

文／小椋幸司

▶大小の石で組んだ堅牢な石垣が山の中腹へと続く。福岡県星野村





▼7月、田の草取りに来たあと、カカシを作って畔道に立てた。



▲水を張った高知県橋原町の千枚田。
▼5月の連休にはオーナー達が田植えにやってくる。



棚田の歴史は水田のそれとほぼ等しく古墳時代にまで遡ることができる。本格的な石垣技術が導入されたのは江戸後期といわれ、山間地の耕作面積を飛躍的に増大させることになった。つまり棚田は、河川の氾濫をさげ好んで山間にムラを拓いた古人たちの、生活の知恵にほかならないのだ。

さらに近年、棚田の持つ貯水能力について再評価する声も多い。日本は世界でも有数の山岳国であるうえ降水量も多い。したがって、土壌流出など激しい浸蝕作用を受けやすい。ところが、全国で約12〜13億立方メートルともいわれる棚田の貯水力が、それを食い止めているというのだ。

当然、洪水や土砂崩れなどを防ぐ治水効果も指摘されている。また、水田特有の脱窒素作用が、下流へ流れる川の水や地下へ浸透する水を浄化するなど、海岸まで続く広い範囲の生態系に大きく関わっているという研究・調査結果も報告されている。

その棚田(谷地田といわれるようなものも含む)が日本の水田面積の大部分を占めていた時代は長い。しかし高度経済成長以降、棚田は静かに、そして確実に姿を消しつつある。直接的な生産性向上を目指す農政と、山村の高齢化・過疎化がその衰退を押し進めてきた。

現在棚田が全水田面積に占める比率は2割を下回ったといわれる。姿をとどめていても実際には水の張られていない田んぼも多い。いつのまにか、日本の田んぼとは、コンクリートの用水路で仕切られた、だだっ広いそれを指すようになってしまった。

◀10月全山紅葉の秋。いよいよ収穫。農家がよく手入れしてくれていたため大豊作。ずっしりと重い稲穂を子供も大喜びで背負って運ぶ。



▼刈り取った稲は昔ながらの方法でハザにかけ天日で干す。



そのような現状にあって、棚田を守ろうという機運もいっばうで生まれつつある。千枚田の王国、高知県檜原町で3年前から行われている「千枚田オーナー制度」もそのひとつ。休耕田になっている棚田を年間4万10円（四十万十川にあやかり）の賃貸料で、都会の人に借りてもらおうという試み。オーナーとなった都会人は、可能な限り田んぼに足を運び農作業を体験する。秋になり収穫された米は、すべてオーナーの元に届けられる。発案者の願いは、「都会の子供たちに、実際に米ができてまでの現場をみてもらいたい」、そして「千枚田が、生産者と消費者の理解の場となり、農家と都会の人との交流の場になってほしい」というものであった。

始まって4年目を迎えるいま、その試みは



▲やがて千枚田は渡り鳥たちの楽園となる。



▲三三、精米作業も体験。そのあと、出来たての新米で早速モチつきをした。



▲日本海を見降す丘に広がる緑のじゅうたん、能登半島の千枚田(輪島市白米地区)

大きな実を結ぼうとしている。定員30組の募集は順調、3年連続の家族も数組ある。なにより素晴らしいのは、この制度をきっかけに、当地へ移住しての米づくりを決意した人がでてきたことだ。棚田は建造物ではない。耕され、使われて、はじめて命を保つ。

● 全国の町や村を巡回する劇団(株)ふるきやらネットワークの企画により、今年7月には、「棚田フォトコンテスト」の実施が決定。また9月には、同劇団と檜原町を始めとする、やはり千枚田で有名な能登や各地の自治体を中心となつて「第1回全国棚田(千枚田)サミット」が予定されている。

● 司馬遼太郎はその著書『街道を行く』の中で檜原の棚田について触れ、「万里の長城も人類の遺産やけど、檜原の随所にあるという千枚田も大遺産やな」と記している。

しかしその規模を除けば、日本中のすべての棚田が、檜原や能登の千枚田同様、大きな遺産的価値を有している。その価値とはいうまでもなく、何百年も営々続けられてきた人々の労働の尊さ、そして、やはり代々引き継がれてきた、自然との共生を如実に実現する、私たち祖先の深く優しい知恵にはかならない。

● 問い合わせ先

檜原町役場 ☎0889 (65) 1111

(株)ふるきやらネットワーク ☎03(3355)0420

写真/英伸三・永田収・田中史彦

① 特集 美しい自然や風土を次世代へ 自然景観・環境を守る



「町並み保存」は「町づくり」の第一歩 観光より住民生活を最優先して——愛媛県内子町

昨春秋、ノーベル文学賞を受賞した大江健三郎氏の故郷として、にわかにもマスクミの脚光を浴びた愛媛県喜多郡内子町（人口1万2000人。瀬戸内の中核都市・松山市から南西に約40キロ。車だとおよそ1時間半、最近停車するようになったJRの特急で25分ほどの位置にある山間の町は、じつは、ユニークな「町並み保存事業」を展開する自治体として、知る人ぞ知る存在でもある。

門前町として成立したといわれる内子町の歴史は、近世から中世末までに遡ることができる。その後、農産物の集積地、四国遍路の要所として栄え、やがて、農家の収入源として和紙の製造、次いで木臘生産が台頭した江戸末期から明治時代にかけて、町はその隆盛を極める。

当時の面影を色濃く残す旧街道沿いの八日市護国寺地区（延長750メートル、3・5ヘクタール）が、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されたのが昭和57年のこと。それからすでに10年余りの月日が経つ。

高度成長の成熟期に芽生えた町並み保存の機運

内子町の町並み保存運動のスタートは、じつは、国の選定からさらに10年ほど先立つ。昭和47年、文化庁が「第一次町並調査」の対象候補に同町をリストアップしたのをきっかけに、地元住民の一部、そして数人の役場職員から、町並みの歴史的価値が指摘され始めたのだ。高度経済成長が熟し切り都市化のうねりが農山村に及び始めたのを、むしろ歓迎する風潮が強かった時

代背景にあって、こうした機運が芽生えたのは注目に値する。

以後、先進地である長野県妻籠宿への研修や実態調査などの地道な取り組みが発案者らによって続けられる。その結果、昭和53年に町単独の保存修理事業がスタート、翌年には、役場内に対策プロジェクトチームが設置されることになった（のち昭和58年に保存室、平成3年には対策課に）。

「当時としてはかなり目新しい事業でしたから、最初からすべての住民に理解してもらえたわけではありません。何度も該当区域の家に足を運び、理念と具体的な取り組み内容を説明して回るのが、担当職員の大変な仕事でした」と語るのは、町並保存対策課の亀岡さん。行政主導型ながら地域住民とのコミュニケーションも的確に図る戦略は



古い民家を移築して宿泊施設にした「石畳の宿」。地域のお田さんがおいしい手料理でもてなしてくれる。☎0893-4419730



みごと功を奏し、昭和55年10月、「内子町伝統的建造物群保存条例」を制定公布するに至る。そして昭和57年、文部省による「保存地区」の選定を、また翌58年には県の「文化の里」の指定を受けることにより、国、県、町、住民による本格的な保存事業がいよいよスタートしたのである。

事業の内容は大きく分けて2つ。ひとつは規制や認可制による、いわば町並みの監視。もうひとつは補助金による、補修工事などの援助である。後者は、伝統的建造物等の修理事業とそれ以外の修景事業の2通りに対象が分けられ、さらに母屋、石垣、土塀、防虫処理など工事対象ごとに細かく補助限度額が設定されている。

あえて観光を排する姿勢で 永遠の町づくりの第一歩

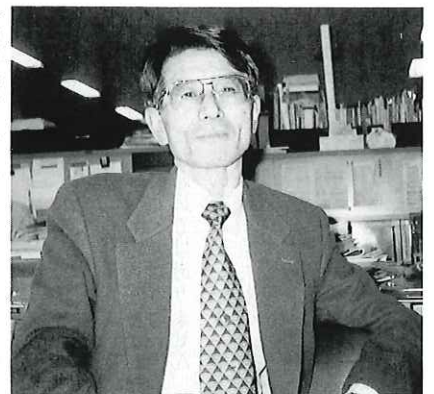
ところで、内子町の町並み保存運動について特筆すべきは、なんといつても、観光型を排するというスタート以来の一貫した姿勢にあるだろう。それは、年間延べ30万人もの観光客が訪れるようになった現在でも貫き通されている。「観光はあくまでついでにきたものに過ぎません」とは前出の岡田さん。「タイアップによる観光開発を提案していただけの旅行代理店もいくつかありますが、お断りしています。大量の観光客がどっと訪れて住民の暮らしに影響が

出ることには、私たちの望むところではないからです」

町並み保存に取り組み自治体のなかには、それを核に観光開発を目論むところも少なくない。観光客が落とす金で潤う地元経済、そこから生じる雇用機会など、地域活性の起爆剤として、観光が持つ有効な側面はたしかにいくつもあるからだ。内子町も各地の農村の例にもれず過疎の悩みを持つ町である。基幹産業である農業は、働き手の高齢化、後継者不足に悩んでいる。そんな状況にあつて、あえて観光を排そうという町の方針には、いったいどんな理念が隠されているのか。

「町並み保存」は、これから永遠に続いていく町づくりのほんの足掛かりにしかならないんです」

そう語るのは、町並み保存の発案者の一人、内子町役場・企画課の岡田文淑さん。「これまでだっていたの地方自治体は、足算の町づくりをやっていた。道路や橋や文化施設、そうしたモノがないと遅れていると考え、公共事業でそれらをポンポンとつくってきた。あるいは、都会から人が来ないのを悪いことのように考え観光化に必死になる。しかしそれらの試みが地域の暮らしをほんとうに豊かにしたかという大いに疑問があります。そこで私たちは逆のことを考えた。つまり、そこにあるものを生かす町づくりです。



村並み保存に取り組み岡田さん

長い伝統に培われてきたモノや文化に価値を見出し、その所有者たることに自信を持って人々が暮らす町づくり、といつてもいいでしょう。ですから内子の「町並み保存」は、観光型でなければ遺産型でもない。そこでの生活が豊かに営まれるべきものなのです」その理念は、たんに町並み保存から観光色を排することだけに現わされているのではない。岡田さんの言葉どおり、その理念はいま、「保存地区」から町全体へ、そして「町並み」から町の環境・文化にまで広がり、水車小屋の復元や古民家を改造した町営民宿の経営、川を考えるシンポジウム開催といった具体的事業として次々結実している。つまり、岡田さんの言う「永遠に続いていく町づくり」の中心を太く貫いているのだ。

雑貨屋も床屋もある国の選定区域 八日市護国寺地区

役場の人たちの言葉を思いながら内子の町を歩いてみる。なだらかな坂道の両脇に、漆喰塗りの大壁や葺戸を擁する民家、商家、土蔵が並ぶ八日市護国寺地区。そのまま時代劇のオープンセットに使えるような町並みにあっても、生活の息遣いはたしかに感じられる。

各家の玄関にはちやんと表札がかり、郵便ポストも付いている。和紙づくりの商家などに混ざって、現役の雑貨屋もあれば床屋だつてある。床几と呼ばれる独特の縁側で、決して土産用だけとは思えない野菜の無人販売がされているのも印象的だ。通りを行く人はもちろん観光客だけでない。農作業用の軽トラックに乗ったオジさんや制服姿の中学生が自転車引き引き通りすぎる。

現役の商店街として住民の生活を支える本町通りにも歴史の面影は濃い。比較的最近建てられたと思われる商店や飲食店にも、景観への配慮がうかがえ、また、古い学校や警察署の建物の内部を改造して現在も利用している公共の施設も点在する。

そうした「生活の場」としての町並みの中にあつて、観光客が有料で見物できる施設もいくつかある。中でも大

正5年に建てられた「内子座」は見物。老朽化のためにいったん取り壊されかけたものの、町並み保存事業の一環として、町民の熱意で修復、復元された木造2階建ての劇場では、当時そのままの回り舞台の仕掛けや、「奈落」と呼ばれる舞台裏などをつぶさに見学できる。現在でも、しばしば歌舞伎や講演が催されているので、観客としてそこに入るのも楽しそう。

また、保存地区の「上芳賀邸」はかつて盛んだった木職商家の博物館。本町通りの「商いと暮らしの博物館」は明治から続いた実際の薬屋を町が買い上げ公開している。いずれも、展示されているのは、そこに根付いていた仕事と暮らしてある。そのためであらう、そのリアリティーが見るものに新鮮な驚きを与える。それらの施設の窓口やガイドを担当するのも、役場の嘱託職員として雇われた地元の主婦たちである。

ブルドーザーで切り開いた土地に忽然と現れるテーマパークなどは、まさに対極にある施設といえそうだ。

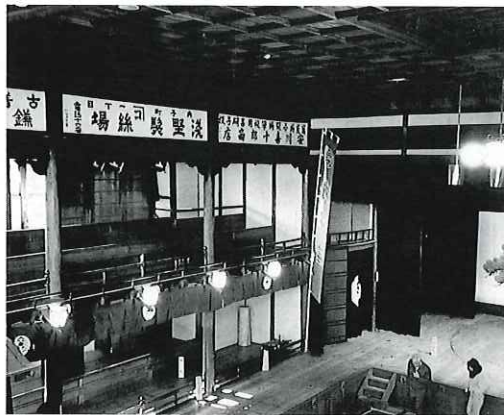
「観光を排した町並み保存」と行政の

人は言った。しかし、内子の町並みは決して訪れる人を拒んではない。長い年月に培われた伝統的景観と、そこに静かに息づく地域の暮らしは、むしろ温かくわれわれを迎えてくれる。

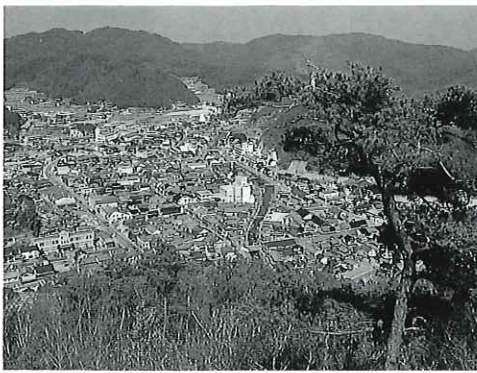
内子の「町並み保存」は、都市と田

舎の新しい交流の在り方を、そして、激しい時代と社会の変化のなかにあつて、ややもすると見失われかけている地域とそこに生きる人のアイデンティティーの持ちようを、雄弁に語ろうとしている。

(小椋幸司)



上・上右/大正5年建造の内子座。当時のままでの回り舞台や客席を修復、芝居公演が行われている。右下/明治から続いた薬屋を再現した「商いと暮らしの博物館」。客が来るとろう人形が説明する。



▲上下町の街並み(翁山から望む) ▶翁座 昨年8月



「白壁の似合うロマンのまち」として町並み保存に力を入れている広島県上下町では、昨年の秋、その象徴である芝居小屋「翁座」が復興、町並み保存への関心が高まっている。

古い町並みを暮らしと共に 「翁座」復興に熱いまなざし——広島県上下町

知代の生家・田岡田邸、明治時代の建物で火の見櫓も当時のまま残っている旧警察署（現在は食事処岡田屋）など貴重な建造物が多数あり、一般の民家も大半が明治時代に建てられたもの。これらの建物は、暮らしに深く関わりながらいまもそのまま使われ、保存・改修は町民の手で行われている。

町並み保存に熱心な 商店主や郷土史家たち

町並み保存と文化の風土づくりに取り組んでいるのは、「上下町町並みづくり研究会」（松井義武会長）、「上下ふるさとを語る会」（藤井徳夫会長）、商工会（伊藤勝郎事務局長）らの郷土史家や商店主たち。

「古いものをそのまま保存するのではなく、生活のあるいきいきした町にしていきたいんです。とかく出ていきたがる若い人達が、郷土の歴史や文化財に関心を抱き、ロマンあふれる町として愛着を持ってほしいというのが私達の願いです」と松井さん（70歳）は語る。

松井さんに町を案内してもらって

ると、近所に住む真野武さん（時計店経営）や柳父簾一さんもやってきた。真野さんは石州街道に面した家の壁を最初になまこ壁に改修し、灯籠第一号を設けた人。柳父さんは旧家の出家をよく手入れしながら、一室を工房にしてバイオリンを製作、作曲やコーラス指導にも当たっている。

「上下ふるさとを語る会」の藤井さんはスーパーマーケットを経営するかわら、若い人や商工関係者に働きかけ、町内各地に看板を設けたり、観光による町おこしに取り組んでいる。

古い町並みに新しいおしゃれセンスを取り入れているのは「上下画廊」を運営する重森由枝さん。大学時代に知り合ったのが縁で酒造業を営むご主人について東京から嫁いできた。家業を手伝う一方で、10数年前から趣味の骨董品や、東京のハイセンスなブティックを売る店を開設、酒蔵を欧州の古い建物風に改装して画廊&ビザハウスを経営している。

「女性や若い人達が集える場所が今までなかったんです。東京や欧米の新しいセンスが味えて夢を語れる場所にと

広島県の文化百選に指定された上下教会、明治時代建造の蔵を戦後改造してオープンした。



旧警察署は手入れされて食事処に。屋根には火の見やぐらがあり、見学も自由にできる。



酒蔵を改装した「上下画廊」を営む重森さん。絵画や工芸品の展示の他ミニコンサートも開催。



町並み保存のリーダー松井さん(左)と時計店経営の真野さん。なまこ壁を最初に改修した。

思っています」

広い画廊内ではミニコンサートや研修会も開かれ、古い町並みの中の新しい文化拠点として人気を得ている。

「上下町はとても暮らしやすく商店の皆さんも熱心ないい町。でも中高年が元氣な割には若い人がいま一つ元氣がないような気がします。観光客が少しでも訪れるようになれば、後継する若い人も増えると思うんです」と重森さんは言う。

実は上下町には、広島県を代表する温泉郷・矢野温泉がある。観光客も多く、町の観光の目玉になっているが、

温泉と町の中心街は離れているために温泉客が商店街へ足を運ぶことはあまり期待できないのが現状である。

「翁座」、30年ぶりに大賑わい

そんな上下街が全国的にも注目されホットな日々を迎えたのは、「翁座」の復興だった。

大正時代に建てられ、ほぼ当時のまま残っている芝居小屋で、昭和30年代半ばまでは大衆演劇や映画が上映されてきた。舞台や花道もあり、大友柳太郎、高田浩吉、鶴田浩二らも翁座の舞台を踏んでいる。その後は映画が主流

となったが、テレビの進出で30年代後半に閉館に追い込まれた。

広島県内に現存する最も古い劇場であるため、持主の田中さん一家や町並みづくり研究会メンバー等は保存、復興を願ってきたが、その話を聞いた萩本欽一(タレント・映画監督)が、自ら監督する映画「欽ちゃんのシネマジック」の完成特別上映会を翁座で行うと発言した。

それがきっかけで復興へ向けて県内外からカンパが寄せられ、秋には町外の人も多数参加して休館中の劇場内の大掃除が行われた。建物の土台がしっ

かりしていたことと、古い映写機がらよく手入れされていたことから再開はうまくいき、9月6日には欽ちゃんや仲間の役者たちも参加して映画会が開かれ、翁座は30年ぶりに大賑わいを取り戻した。

その後、翁座は持主田中太郎氏の手によって修復・改造が行われ、希望者は入館見学ができるようになった。

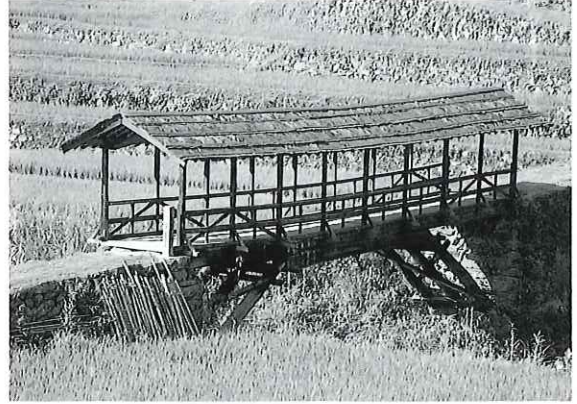
映画の上映やイベント等の開催はまだ本格的にはじまっていないが、町並み保存のシンボルとして愛されながら徐々に芸術文化の芽が育っていくことだろう。

●上下町役場 ☎0847-6212111

でぼら・エッセイ

魅力ある田舎をつくる

森戸 哲 (地域総合研究所長)



内子町河内地区にある屋根つき橋のひとつ。
このような橋が他にもある。

谷間の田に涼しい風が吹きわたる。穂をつけはじめた稲を慈しむように、水がしつかりと根元を潤している。田の間を流れる川は、コンクリートの護岸などもなく、水も清らかに澄んでいる。所々に昔ながらの堰が残っていて、流れに変化をつけている。マテイソン郡の橋ではないが、ポツンと架かる小さな屋根つき橋が道行く人の目を止めさせる。

丁寧に耕された斜面には、葉たばこや果樹が見える。さらにその上には、森が続いている。一面が、緑の谷である。

川を遡ると程なく最上流だ。水車小屋が三棟ある。水車のひとつが米をついでいる。川の水を手にとって飲む。うまい。

●グリーンツーリズムの試み

ここは町並み保存で知られる愛媛県内子町の山間部である。この町の計画づくりに関わってきた私たちは、専ら町なかの旅館を定宿にしてきた。時折、親しくなった家に民泊したりした。

だが、この日は、この谷間にあるカヤ葺きの家に泊まることになった。近ごろはカヤ葺きもほとんど残っていない。実は、この家屋は、役場が移築して、宿泊施設として整備したものだ。正式なオープンを間近に控えて、いわば試運転のつもりで私たちが寝泊まりするのである。地元の人たちの心尽くしの御馳走に一同感激しながら、囲炉裏を囲んで、呑み、語り、いつの間にか夜が更けていく。

翌日は、別の集落へ出向いた。ここでもカヤ葺き家に泊まる。眼前に伊予の山並みが広がる。格別眺望がよい。こちらは、近隣の農家の方が空家に手を入れて、たまり場兼宿泊所に改造した民宿である。電話とファックスはあるが、テレビはない。

オーナーが常駐しているわけではないので、基本的に客は自炊をする。今夜は、早朝海で釣り上げた魚を料理して、青竹の杯で酒を酌み交わすという趣向であった。芝生の庭が格好の野外パーティーの場となる。近所の家族たちも加わって、宴は続く。ふと見上げる夜空から、満天の星が降りそそぐ。

こうして、ささやかながらも、ぬくもりのある二つの宿を体験した。行政と民間、それ

ぞれの「日本版グリーンツーリズム」ともいふべきか。

●都市と対峙できる田舎

近年、私は事情が許す限り、欧米では田舎の宿に泊まろうと心がけている。田舎の快適さが、何となくわかってきたせいかもしれない。

外国人旅行者の間でも、農村観光は人気が高い。とくに何の変てつもない田舎が好まれている。海のスポーツなどの「ブルーツーリズム」や、スキーなどの「ホワイトツーリズム」に対して、「グリーンツーリズム」と呼ばれるのがそれだ。農家自身が宿を経営しているような場合をとくに「アグリツーリズム」と呼ぶこともある。こういう宿は、農家の暮らしや産物に直接触れられるので、新鮮な感動がある。

宿泊は、私たちの場合、長くてせいぜい二、三泊である。そそくさと出発する私たちに向けられる他の滞在客の眼差しに、憐憫の光を感じとることもしばしばだ。トスカナの農家民宿で主人から予約ノートを見せてもらった。予約はすべて一週間単位である。私たちは例外というわけだ。

そして、この夏、コロラドの牧場に一週間余り滞在して、長逗留の片鱗を味わった。滞在は長いに越したことはない。とはいっても、彼等の休暇の長さが大きく違うのも確かである。年間一人あたりの平均宿泊日数については次のようなデータもある。フランス二

ヨーロッパの田園地域の並木。
都市の街路樹に劣らず美しい。
(撮影・3枚とも/森戸哲氏)



九・二日、イギリス二・三日、ドイツ十七日、そして日本はわずか一・九日だ。

日本人は休暇が短いため田舎などに悠長に滞在できないのか。それとも、逗留に値するような魅力ある田舎が少ないのか。

欧州の大都市は、華の都パリに代表されるように、絢爛にして、豪華である。しかし、田舎もまた魅力にあふれている。田舎ならではの誇りを持って、したたかに都市と対峙しているのだ。だから、田舎に住いを持つことは、都市人の憧れになっている。王侯貴族も新興成金も、田舎に邸宅を持つことをステータスのひとつとみなしているようだ。

欧州人は概して田園が好きらしい。田舎道を歩いている都会人によく出会う。こういう人たちは、一日中ただひたすら歩いているのだ。散歩人協会などという大きな団体もある。散歩といっても、半端じゃない。

魅力的な田舎をつくるのは容易ではない。国の基本政策に関わる大仕事である。イギリスなどでは、農村の伝統的な景観や環境を保全するために、涙ぐましい程の努力をしている。古い農家や納屋を修復保存するのは当たり前に行われている。日本と異なるのは、このような活動が、非営利の民間組織によって担われている点だろう。

また、機械化のために広げた農地を再び小区画に戻し、伝統的な石積み垣を再生したり、耕地の境界や水辺に樹木を植えたり、化学肥料でなくても育つ在来種の牧草を奨励したりと、経済的生産性を超えた政策が展開されている。こうした苦勞の積み重ねの上に、美しい農村景観が開花するのである。

●「町並み」から「村並み」へ

再び、内子町に戻ろう。地元の人たちが「町部」と呼ぶ町の中心部は、周辺の農村地帯によって支えられてきた。さらにそれを支える基盤は、地域全体を取りまく森林地帯である。しかし、このような全体構造が崩れるなかで、森や田畑の荒廃が進み、農村部の活力が失われていく。農村の環境は農林業という営みによって支えられている。農村景観や環境保全と、農林業振興は不可分といえよう。

内子町の課題のひとつは、町並み保存でいくぶん活気を取り戻した中心市街地に対比して、衰退の気配が漂う周辺の農村部に活力をつけることである。町並み保存の成果をテコに、農村環境の保全に本格的に取り組む必要

があるのだ。このポリシーをキャッチフレーズ的に表現すれば、こうなる。町並みから村並みへ、そして山並みへ。

村並みは、村の家々を美しくするだけでは済まない。地域の基盤である自然環境に目を向ける必要がある。内子では森林生態系の調査を実施した。新しい総合計画の中では、町の将来像として「エコロジータウン」を掲げた。なかなか高遠な目標であり、重たい課題である。町民の強い意欲の表明といえる。

そして、農村環境保全の具体的な事業が、冒頭に触れた谷間の地区で展開されているのである。これには、役場の職員と地元の中堅農家が手を携えて取り組んでいる。

谷間の集落に力をつけるには、心ある来訪者を受け入れる仕掛けも必要だ。カヤ葺き民家や水車小屋もその一環だ。水車米は、有機農業への呼び水でもある。堰の調査もした。できるだけ「近自然工法」で河川の整備をするためだ。

美しい、魅力的な環境をつくるのは、単に来訪者を呼び寄せるためだけではない。何よりも自分たちが、心豊かな、誇りある暮らしを営むうえで欠かさないからだ。

四国の小さな森の町の、魅力ある田舎づくりの試みは、始まったばかりである。



麓川にかかると水車小屋

茅葺民家の里・保存

江戸時代の民家が点在 京都府美山町「茅葺の里」

由良川の清流と緑豊かな山々の連なるゆるやかな斜面。そこに先人たちの拓いた田や畑と茅葺民家が点在する。ひな壇のように立つ茅葺の家々と屋敷林は、日本農村の原風景といえる。

美山町北地区は、東西600m、南北300mの範囲に、およそ50戸の家屋があり、その代表的な建物が茅葺屋根の家。全体の約6割を占め、その残存率は全国でも折り紙つき。

昭和47年に文化庁が集落・町並み調査を開始、以来部分的に環境保全地区や文化財指定を受けてきたが、平成5年11月に茅葺屋根を中心とした景観一体が重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

美山町は京都府の中央部にあり、若狭街道沿いに開けた集落。

現存している茅葺民家は江戸時代中期以降に建てられたもので、母屋の他に小屋、露地門、土蔵などがある。

入母屋造りで、千木、破風等の構造美に優れ、山村家としての特質を有することから「北山型」として注目さ

れている。

集落内には、母屋のまわりに石垣をめぐらし、手入れされた庭木や畑、松や柿の古木がよく調和している。里道には石塔や石仏があり、伝統を守ってきた人々の生活風土が感じられる。

保存地区に指定されたことよって茅葺のふきかえなどの費用は助成されるようになり、民俗資料館には見学者がグンと増えてきた。

4つの宿泊施設（うち3軒は民宿）も利用者が増えた。北地区住民が運営に当たる食事処「きたむら」は、昨年4月オープン、山里の味覚を味わい、地元の土産品を求める人で賑わっている。ここでにこやかにキビキビ働いている中野邦治さん（23）は、大阪の大学を卒業してUターンしてきた。

「知名度が上がるのは良いこと。マイナス面もありますが、ある程度は仕方ないことだと思っています」

中野さんら青年会が中心になって、12月24日には「きたむら」で音楽コンサートを開催した。

伝統の中に新しい文化や交流の場を

創造していきたいと思っている。

民俗資料館では、6人の主婦が交代でお茶を入れたり説明したりの仕事を受け持っている。その日の当番中野こしずさん（60）は、「この仕事をはじめて、いろいろな人と話ができるのが楽しいですね。家事や畑仕事にも精が出てきましたよ」と言う。

資料館となった家屋は「伊助家」と称された家で1750年頃の建造物。屋根裏の見学も可能で、主家、小屋、土蔵の3棟から成っている。

集落内には生活改善センターが4年前に開設した「きび工房」という作業場もあった。地元で穫れた新鮮な素材を使って三色団子や栃もちが作られ、農家の平飼卵、しめじ、味噌、こんにゃくなども集められて、来村者に販売すると共にふるさと産直便として全国へ発送している。メンバーは13人（男性4人、女性9人）、毎日午前中は団子作り。きびとよもぎを入れた三色団子は私たちの真心をこめて作った名物。おいしいよ」と元気な声がかえってくる。

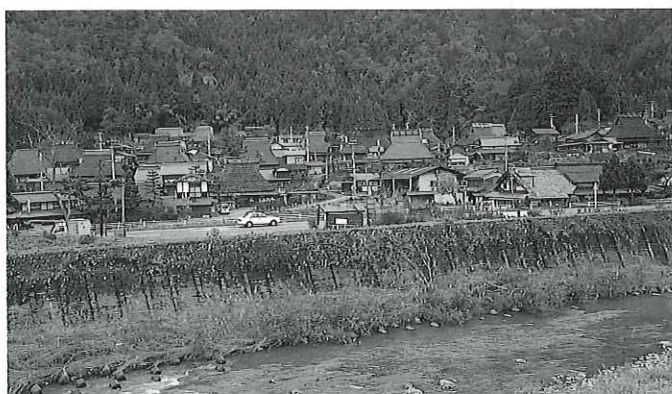
道ばたには野菜の無人販売コーナーもある。

「一個100円だけど、お金を入れな人もいるので1個60円位になってしまします」と、近くのたばこ家のおばあさんは言う。保存地区に指定されたことについては、

「世間体もあって、家は守らにやならんと思っちゃいましたからホッとしていますが、ええことばかりはないです。畑を踏み荒らされたり、家を覗かれたりして落着かんです」と言っていた。

●問い合わせ／

美山町役場 ☎0771-7510310
きび工房 ☎0771-7710207
（餅、卵、味噌、漬物、乾いたけなどの10品セットが4500円）





▲北地区には約30戸の茅葺民家がある。
 ▶右/民俗資料館。見学者に主婦らが説明に当たる。
 ▶中/Uターンして食事処で働く中野さんと人気の田舎料理定食。



◀ぎび工房で働く女性たち。
 ▼屋根のふきかえ用に茅を栽培、乾燥させている。



茅葺民家の里・保存

景観コンテストで農林水産大臣賞 富山県平村「相倉合掌集落」

富山県平村の「相倉合掌集落」は、平成6年の第2回景観コンテストの集落部門で農林水産大臣賞を受賞した。

切妻型茅葺合掌造りの家屋が23棟残っている相倉地区は、昭和43年に国の史跡指定を受け、貴重な景観の維持、保存に当たってきた。補修等には補助金が出るようになり、地区でも史跡顕彰会を組織して、景観を守るための美化活動に力を入れている。

平成5年には、農林水産省の山村振興事業の一つ「農林地域ふるさと生活整備事業」の助成を受け、電柱埋設を行い、併せて道路等をライトアップ。相倉集落の夜の幻想的な風景の演出にも力を入れている。

平村は富山県の西南端に位置し、山を越えると利賀村、国道156号で岐阜県に入ると白川郷に至る。

村の中央を庄川が貫流し、河川によって浸食された山地が、起伏の多い急峻な地形を生んでいる。平坦地は少ないが、段丘の上には見晴しのよいゆるやかな斜面の台地が広がる。

相倉地区もそんな小高い場所に位置する集落で、江戸時代から明治初期頃建てられたという合掌造りの家がそっくり現存している。民家は狭い敷地を上手に生かして、居住となる母屋と貯蔵小屋があり、3mを越える積雪にも耐える柔軟性を持った構造となっている。

周辺には手入れされた柵田や畑があり、民宿を営む家が多い。集落の入口のところに広い駐車スペースがあり、観光客はここに車を止め、歩いて村内を見て歩く。私たちが訪ねた初冬の日曜日には、宿泊客らしい人の姿はなく、クルマでちよつと見にきたという観光客たちが三々五々。土産品を売る店も二、三軒あるが、いわゆる観光地によくある雰囲気はなく、軒先まで周辺の特産品や地元産の農産品を並べているといった感じ。

「紅葉真盛りの頃や夏休み、5月の連休の頃はいっぱい人がくるけど、普段は日曜日でも静かなもんです」と、駐車場近くで店を出す主人は語る。

集落の入口に近い家で民宿「勇助」を営む池端せきさん(74)は、家の南側で山と積まれた大根を洗っていた。山から流れてきた水がゴウゴウと井戸に流れ込んでいる。「家族は息子夫婦と3人」といっていたが、息子は富山市でカメラマンをしており、休日ごとにやってくるをうて、「昨日きて、大根掘りを手伝って、さつき帰っていったがや」という。「見物にくる人は多くなってきたけど、民宿に泊ってゆつくりしんさる客は少ないです。料理は昔からあるお膳に並べて、たっぷり田舎の味を食べてもらいます」

客のある時は富山から嫁が手伝いに来てくれる上に、近所の人も応援に来てくれるが、一般的に古い建物の民宿は敬遠される傾向にあるようだ。

我々に「持っていけ、持っていけ」といって大根やカボチャを手渡してくれた。春になったらぜひ泊りにいきたい

平村(人口1700人)は2つの国道が走っているため、富山市や金沢市からもクルマで一、二時間の距離。村の美しい自然に魅せられて都市から移住してくる人も増えてきた。

なかでも木工家・折口さんら3家族は、納屋を改装した手づくりの工房で、地元産の木材を使った家具製造をめざす脱都会派。月一回、金沢や富山市に住む人を招いて大工教室を開催、地域の人達との交流も広がってきた。

「我々のめざす手づくり家具はそう売れるものではないので生活はラクではありませんが、平村での生活は満足しています。木のたくましさ、ぬくもりを伝えていきたいと思っています」

山と川に抱かれた村の、古い伝統と新しい文化の芽ばえ。村では昔伸びせず生活重視型の村おこしをめざしている。

世界的な文化財として保護を 白川郷・五箇山の合掌造り集落

合掌造り集落としてすっかりおなじみになった白川郷は普段着の姿で、静かな日曜日を迎えていた。

国道沿いには、民家のたたずまいを生かした土産店、飲食店があり、以前より観光地らしい風情が出てきたが、観光バスのツアー客も減った初冬の時期は、各々の家は漬物や雪囲いの準備で忙しい。

雪で覆われた年末年始頃になると逆

平村・相倉地区の合掌造り集落。民宿を営む池端さんは大根漬けなどに忙しい。



に観光客が増える一方で、白銀の中に立つ合掌造りの家並みは大変美しく幻想的だ。同じ合掌造り集落でも白川郷の場合は保存状態がよく、常に人が生活し、手入れされながら保護されてきたことが伺える。

文化庁は昨年9月、富山県の平村、

上平村と岐阜県の白川村の3村に残る「白川郷・五箇山の合掌造り集落」を世界的な文化財として保護する「世界遺産条約」の世界遺産一覽表への登録候補に決定し、ユネスコ世界遺産委員会に推薦した。

日本が推薦する文化遺産としては、

すでに法隆寺、姫路城が登録され、「古都京都の文化財」が審議中。

白川郷・五箇山の合掌造り集落は4番目になり今年12月に決定の見込みだ。世界遺産に登録されることにより、町並み保存や古い文化・風土の見直しがさらに高まっていくことだろう。

切妻型茅葺合掌造りの代表地区、白川郷。現在も親子三代で暮らす家が多く、家屋もよく手入れされている。左は、雪の日のファンタジックな白川郷。

(カメラ/小林恵)

●問い合わせ

平村役場 ☎ 0763-

66-2131

白川郷観光協会

☎ 05769-6-

1013





▶クリーム色のユニフォームが若々しい
ZiiZii工房スタッフ

フランス料理、ハム工房、そしてお年寄りという意表をつく組み合わせが、町の新しい顔になった愛知県足助町。紅葉の香風溪で知られた山あいの小さな町は、高齢者の知恵を活かしたさまざまな取り組みが成功して、県の内外から注目されている。

愛知県足助町は紅葉の名所として毎年秋には大勢の観光客で賑わう町。古

2 人々の英知とユニークな施設で 高齢者が主役の町づくり 福祉と観光の町——愛知県足助町

くは尾張三河と、信州を結ぶ伊奈街道の要所として栄えた町だった。そんな面影がそこに忍ばれる町並みが、足助川に沿って続いている。

その静かな山里に、北欧のビラを想わせるモダンな建物が出現した。足助村が町になってちょうど一〇〇年目の1990年、足助町高齢者福祉センター「百年草」の誕生である。

ダンディーな年寄りを 作ろう

町は高齢者福祉の新しいあり方として、「生涯現役の里づくり」というプランを策定し、お年寄りが社会参加できる拠点として、「百年草」の施設を開設した。

「生涯現役」とは、いつまでも元気で皆が生きがいをもって働ける長寿の社会をめざそう、という考え方だ。行き届いた施設を作り、高齢者をそこに閉じ込めてしまうのではなく、積極的に社会参加できる場を用意し、働ける人にはまだまだ頑張ってもらおう——これが

らの高齢者福祉とはそうあるべきではないのか、というのがプランの基本だった。

そうした考えを受けて「百年草」にはお年寄りたちによる手作りハムの「ZiiZii工房」や、町営ホテル、フランス料理レストランが併設され、デイクアーセンターなどの施設とともに、200円で入浴できる鉱泉大浴場や、集会所なども作られた。

この「百年草」が一般の福祉センターと大きく違うのは、地域の住民に限らず、町外、県外の誰でもが利用できることだ。これにより老若男女、観光客などの多様な人々がここを利用し、「百年草」は高齢者福祉施設という年寄りくさい雰囲気とは無縁の、明かるくモダンな施設として定着した。所長の矢澤さんは言う。「ダンディーな年寄りを作るう、というのが私たちの考えなんです。この辺りの昔の老人たちは、暮らしに必要なものはコッポツと自分たちの手で創り出していた。自然の風土の中で培ったそうした知恵や感性

は、本当に誇るべきもので、年寄りというのはカッコイイものでしたよ。その精神を受けついで、いつまでもダンディーにはつらつと生きる年寄りを、と考えた訳です。手作りハムの「ZiiZii工房」で働くお年寄りなんか、みんな若々しくてカッコイイですよ」

手づくりハムの小さな工場 「ZiiZii工房」

「ZiiZii工房」は「百年草」のオーブンとともに誕生した手づくりハムの工房だ。高齢者の人たちが生きがいをもって働ける場を作ろう、と生まれたこの工房には、毎日沢山の観光客や町民がハムを買いに訪れる。「ZiiZii工房」のハムやソーセージは丁寧にしっかりと作られているから安心と、評判も良く、売上げも好調という。将来は足助町の地域産業として根付かせたいと町では考えているようだ。

現在、この工房で働く16人のスタッフは、シルバー人材センターから派遣されてきた60歳から74歳までのお年寄



▲ハム工場でキビキビと働く高齢者たちと
▶Zii工房で作られるハム、ソーセージ類



◀「百年草」のおしゃれな玄関口

▼町営ホテル（1泊8000円～）
▶フランス料理のコース
（牛フィレ肉コース¥6,500）



▼リゾートホテルを思わせる町営ホテル「百年草」



りたち。クリーム色のユニフォームがそれぞれ良く似合い、誰もが実際の歳よりずっと若く見える。ミンチした肉を腸詰めにする作業をしていた鈴木守人さん（64歳）は、隣町のトヨタ自動車で永年働いてきた。74歳の小澤理三さんは農業ひと筋だった。皆ここで新しい職を得、第二の人生をと頑張っている。

「生涯現役」のスローガン通り、今では町のシンボルの一つとなった「Zii工房」だが、ここにも問題が無い訳ではない。人口約1万6000人。そのうち、65歳以上の人口は2200

人というこの町で、働きたい高齢者の数は増える一方である。「Zii工房」にもいつかは定年制を導入し、ひとりでも多くの人に働くチャンスをと、という声が少しずつ増えてきた。町ではさらに多くの雇用場を創出しようと、次には手づくりパン工房「バーバラーカリー」のオープンを検討中だ。そして今、高齢者たちにパンづくりを指導できる、技術をもった若者を募集している。

「Zii工房」の昨年の売上は1億2000万円、利益は2000万円にのぼるといふ。このハムの販売は

一般の流通ルートにはせず、工房内の売店とホテルのフロントで扱うのみ。名古屋のデパートなどからの引き合いも、すべて断わっているという。「あくまでもここだけで売るといふ戦略を貫いています。小さい規模だからいいんです、こういうのは。大きくなると手づくりなんて、名ばかりのものになってしまいますからね」と、矢澤所長は話す。

フランス料理が自慢の町営ホテル

平成4年にオープンした。訪れた人の誰もが驚くというその外観とインテリアは、従来の町営ホテルのイメージからはほど遠く、洗練されたリゾートホテルといった趣だ。10室ある客室はすべて異なるデザインで、ベッドルームとコタツのある畳の組み合わせや、木の香り溢れるスイートルームなど、どの部屋も個性的。室内には地元の可憐な山野草が活けられ、手書きのメッセージカードが宿泊客を迎えてくれるという、きめの細かさだ。

そしてこのホテルの自慢が、レストランで出す北フランスの家庭料理。



▲茅葺民家を移築した足助屋敷の一部

「ZiZi工房」の手作りハムも料理に使われて、観光客や地元の若者たちにも評判がいい。あえて和食の山菜料理などにしなかったことが、町営ホテルとしての話題につながり、稼働率も60%と好調だ。

取材に伺った日、ホテルは近在の句会のグループと岐阜県からの視察グループとで、10室ある部屋はすべて満室。レストランでのディナーには鳴のマリ



▲竹の産地・足助に古くから伝わる籠づくり



▲竹釘でつなぎ合わせて湯桶やおひつを作る(桶屋さん)

山の暮らしと手仕事を伝える 三州足助屋敷の職人たち

「生涯現役の里づくり」にふさわしい足助町のもうひとつの顔は、紅葉で知

ネや鱒のソテーなどがコースで出された。60代から80代という句会の高齢者グループも、ワインの乾杯で始まるフランス料理を楽しそうに堪能していた。



▲手漉きの和紙と足助産の竹で作る番傘づくり



▲この道ひと筋のベテラン、樺やトチの木でお盆を作る木地屋さん

られる香風溪と、川沿いに続く「三州足助屋敷」だ。この「三州足助屋敷」は「百年草」とともに町づくりプランの一環として、昭和55年に開館。わずか数十年前には見られたこの山里の暮らしや手仕事を、実際に職人らの手によって再現して見せている。

3000㎡というゆったりとした敷地に、長屋門、茅葺きの母屋、土蔵、紙すき小屋、炭焼小屋、鍛冶屋などが並び、昔ながらの作業が毎日続けられている。屋敷の中を歩いていると、なつかしい煙の匂いや、木槌を打つ音、機を織る音などがそここに広がり、

一瞬、遠い昔へタイムスリップしたかのような錯覚に襲われる。

「ここがいわゆる観光施設と違うのは、職人さんたちが単なる見せものとして実演しているのではなく、技術をもった高齢者の人たちが、皆誇りをもって働き、その技術を伝える場としてここが位置づけられている点でしょう」と、鈴木館長が話す。

手渡された「三州足助屋敷」のパンフレットには「この手仕事は民芸でも伝統工芸でもない。自分の生活に必要なものは自分で作るしたたかな山の生活が甦っただけなのだ」と書かれていた。

木地屋の職人さんは80歳の現役、この道50年という竹籠屋さん、炭焼きは91歳と68歳の大山さん父子。何とも頼もしい「生涯現役」揃いである。

「三州足助屋敷」は、名所・香風溪には欠かせない観光ポイントとなった。は欠かせない観光ポイントとなった。高齢者たちがこんな形で活かされ、その知恵や技術が伝承されていく。豊かな町づくりを支える足助町の高齢者たちは、どの顔も自信に溢れて輝いている。

●問い合わせ／三州足助屋敷
☎0565-162-1188
(カメラ)中村国雄 文/金山淑子

人と文化が出会う郷さと 壮大なロマンスを実現する魔術師たち—— 富山県とが利賀村

●初雪の瞑想の郷

昨夜の雨は朝起きると雪に変わって、「瞑想の郷さと」は、その名にふさわしく幻想的、神秘的ですらある。利賀村の初雪だった。

瞑想の郷の中にある宿泊研修施設「暎水の館」は、古い民家の雰囲気にもダンさを加味した建物で、玄関や食堂にそれとなく飾られた生花や枯木のオブジェが、受け入れ側のセンスのよさを感じさせる。

瞑想の郷は利賀村のほぼ中央部、上島地区の小高い山すそにあり、中央の広場をはさんで左が事務所兼展示室の「空想の館」、右が「暎水の館」、広場正面の一段と高い位置にあるのが「瞑想の館」。

案内してくれた武内さんは利賀に魅せられて3年前に東京からやってきた一人。入館すると、一階はチベット仏教の仏像や跳舞（チャム）と呼ばれる装飾品などが展示され、その強烈な視線に会うとたちまちチベット文化の世界のとりこになる。二階の中央に設けられたのが、4m四方の大曼荼羅4点

を展示する瞑想室。「寂静念怒百導」という寂

静42導と忿怒58導の二

つの曼荼羅と、「極楽浄

土図」十一面千手千眼

観音図。気の遠くなる

ほどの緻密な極彩色の

曼荼羅の中に立つと、

無神な我々にも熱い感

動が生まれ、生と死、

あの世というものを想

起する。空間を上手に

生かしたシンブルで格

調ある日本の家屋が絢

爛たる曼荼羅画によく

マッチしている。

平成元年冬、そばのふるさとづくり

をめざす利賀村の一行が、そばのふる

さとネパールのツクチエ村を訪ね、そ

こで出会ったのが四つの寺院の壁に描

かれた仏画だった。それが僧侶であり

絵師であるサシ・ドージ氏の作である

ことに感銘を受けた村長らは、ぜひ利賀

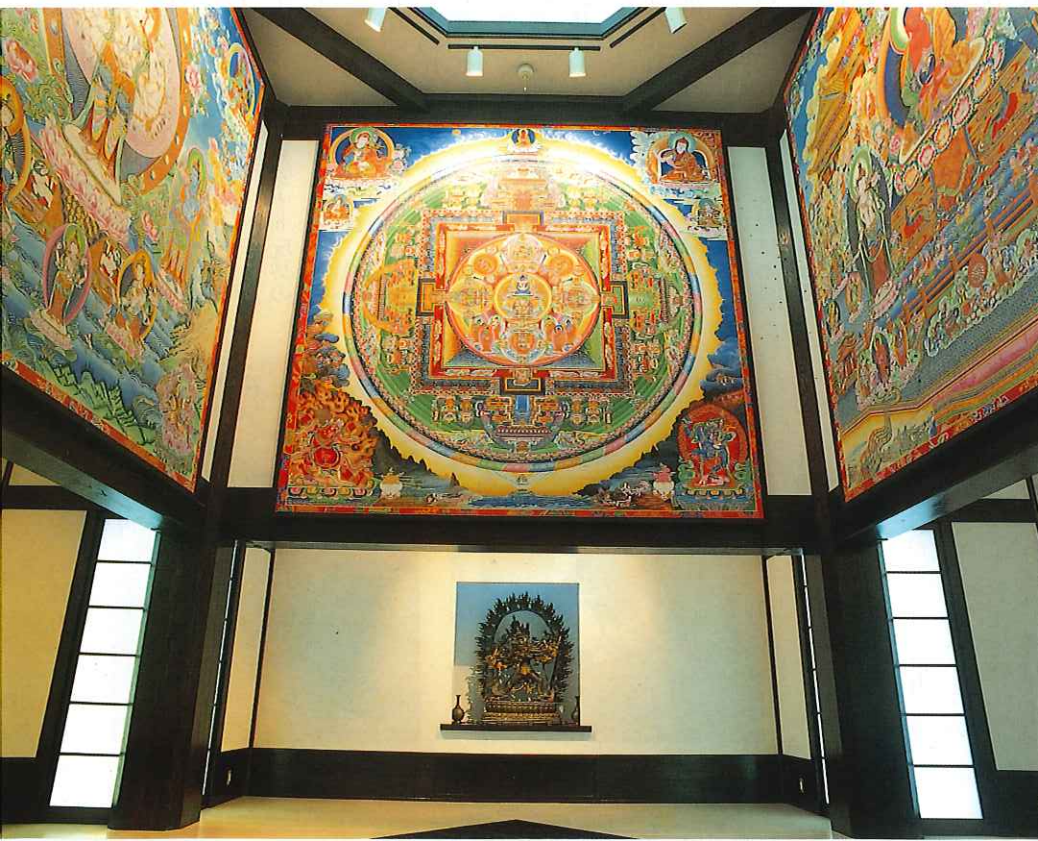
で制作をと懇請し、その年の秋サシ・

ドージ氏と助手2人が来村、瞑想の郷づ

くりがスタートした。日本の仏画の見



▶ネパールの仏像や工芸品を展示する「瞑想の館」
▶大曼荼羅を展示する瞑想室



▶ 瞑想の里の宿泊施設
「瞑水の館」のレストラン。
料理を担当する中谷さん(下)



▲次回作に取りかかるトラチャンさん(左)と弟子。

役場に勤め商工会職員になった中谷さんらは、ちょうどそのころはじまった東京都武蔵野市との交流にも裏方として積極的に関わっている。

さらに、人形劇の僻地巡回公演のため村内の小・中学校を訪れたガイ氏即興人形劇場主宰の水田外氏との出会い

瞑想の郷の事務局長中谷信一さんは、一度は出ていった村へ帰り、もう20年以上も利賀村の「夢づくり」に奔走してきた人。

雪が4m積もる利賀では若者が次々と出ていき、林業での生計が厳しくなると村民も離村していった。3000人だった人口はたちまち1000人に減り、中谷さんを啞然とさせた。

「利賀村の美しい自然や合掌造りの民家、人情をきつと気に入る人々がいるはずだ」

● 中谷さん、奔走する

以来ツクチエ村の人々との交流が深まり、そば博覧会には女性たちも来村して、踊りや歌などを披露した。

いまは再びツクチエ村から絵師サシ・トラチャン一家と弟子、石大工職人が来村、次の作品づくりへ向けて制作がはじまっている。

人々との出会い、新しい文化への情熱と夢が、北陸の小さな村を世界の利賀村へと導いていったのだ。

それにしても、まだ都市から地方へ移住したり、古い民家の保存に誰も関心を持たなかった昭和50年頃に、すでに着々と村おこしを手がけた利賀村の

雪が4m積もる利賀では若者が次々と出ていき、林業での生計が厳しくなると村民も離村していった。3000人だった人口はたちまち1000人に減り、中谷さんを啞然とさせた。

「利賀村の美しい自然や合掌造りの民家、人情をきつと気に入る人々がいるはずだ」

そんな訳で水田さんが利賀村の合掌文化村に移住してアトリエを持つことになる。

合掌文化村は、村を離村する人が売りに出した家を村が買い取って修理したもの。この文化村が気に入って、雪の中を学者や芸術家たちが来村してきた。その中に早稲田小劇場(現SCOT)を主宰する鈴木忠志氏もいた。彼は昭和51年に活動拠点を利賀村に移し、住民票も利賀へ変え、やがて世界演劇祭「利賀フェスティバル」開催へとばばたいいく。

から、東京都中野区にある宝仙学園短期大学の女子学生を招いて現地学習を中心に移動授業を行なう宝仙学園アトリエを設置し「村の生活デザイン」を指導してきた。

実は中谷さん自身もからくり玩具の作家として知る人ぞ知る芸術家。「木挽き人形」等で全国的な賞を受賞、30種以上の作品がある。上島の自宅隣りには父親仁太郎氏と共同で営む「きつつき玩具工房」があり、クラフト作家達に人気を呼んでいる。

行政マンは凄い。

そばで来村者をもてなす

行政マンも凄いが、それに協力し支えた住民たちも凄い。それは「そばの郷」づくりに見ることが出来る。

利賀村へいろいろの人が来村するようになると、その人達をもてなすには、地元の人が昔から何か行事がある度に作っていたそばが一番だろうと中谷さんは考えた。

「村では冬の日の交流の場として、地域の人が集ってそばを打ち、酒をくみ

行政マンは凄い。

そばで来村者をもてなす

行政マンも凄いが、それに協力し支えた住民たちも凄い。それは「そばの郷」づくりに見ることが出来る。

利賀村へいろいろの人が来村するようになると、その人達をもてなすには、地元の人が昔から何か行事がある度に作っていたそばが一番だろうと中谷さんは考えた。

「村では冬の日の交流の場として、地域の人が集ってそばを打ち、酒をくみ



◀きつつき玩具工房を営む中谷仁太郎さん。



◀瞑想の郷の事務局長、中谷信一さん。



◀そばの郷のそば処

は資料館を建設、そばを打ち食べさせてくれる「そば処」は、地区住民による三セ

交して語り踊る習慣があります。当時の村長の地元である豆谷地区は古くから「そば会」が盛んに行なわれており、これを雪像とドッキングさせてビッグな冬のイベントにしようと思いついたんです。そば祭りから都市住民のそばへの関心の多さを知り、そばによる年間を通しての観光施設整備を計画し、そば博士で知られる信州大学の氏原教授らを招いて勉強したり、若い職員をそばの有名地に研修に出したりしているうちに、そばのルーツを訪ねてネパール王国のツクチェ村へ行くことになったわけです」

ネパールの中でも高地に位置するツクチェ村は利賀と風土が似ている。姉妹提携の話が生まれ、あとは前述したように次の夢おこし「瞑想の郷」づくりにへと発展していく。

「そばの郷」は坂上地区に平成2年に

オープンした。村で

ク方式で運営されている。

ここでも古い大きな民家が大活躍。客は土間で靴をぬぎ、広い座敷にゆくり座ってそばをいただく。地区の老人から若い女性までがいきいき働いているのが印象的だ。

昼時のせいか店は大賑いで、金沢市から出かけてきた一家は「雪の頃来るともつと情緒があつていいですよ」と語っていた。

毎年2月にはそば祭りが開かれる。雪の中を来てもらうのだからと、村民のアイデアと熱意で国際キャンプ場

(中村地区)には札幌雪まつり顔負けの雪像が何十基と作られ、村の入口から会場までの道路にはローソクが点される。そのため、一年目に3000人だった来村者は年ごとに増え、いまでは2万人を越える、利賀村のイベントの一つになっている。

一方、平成3年に世界そば博覧会事務局長になった中谷さんは、翌4年、8月から9月の1カ月間「世界そば博」を開催した。参加国はネパール、中国、ポーランド、フランス、イタリア、ロシア、インド等々。

「そばの郷の今後の発展に役立てたいと企画し、入場者は10万人程度と考えていたのですが13万6500人を記録したんです。その間村民は手弁当で大変でしたが、やればできるんだという大きな自信につながったと思います」

と中谷さんは語る。

「その仕掛人の一人が中谷さん？」と言おうと「とんでもない。人手が足りないからあれもこれもと何でもやる裏方です」とキツパリ。

実は、瞑水の館でみた生花も枯木のオブジェもすべて中谷さん自身が創ったもの。皆んなが得意の分野で腕を發揮しているのだそう、宿で食べたおいしい漬物は、地元のお母さんが、常に5〜6品は出したいと日頃から準備しているものだという。

上畠地区公民館の陽だまりの中で次の曼荼羅の準備をしているトラチャンさんたちの仕事を拝見させてもらったあと、合掌文化村へ立ち寄った。

200年前の民家を活用した民俗資料館、稽古場、合掌作りをいかした大劇場、湖の脇に建つ野外劇場、さらに川をはさんで、物産展等が開かれる多目的施設やキャンプ場等々、広大な自然に抱かれた国際級の劇的空間である。夏には演劇祭やキャンプで若者が1万5000人はやってくるというこの文化村も、いまは雪の中で静かに休眠している。川の音、風の音、野鳥の声にあふれた自然のシンフォニーの贅沢さにもふれることのできるひとときである。そういえば利賀村内には、産廃物はもとより、気になる立看板も自動販売機もなく、清潔感にあふれていた。3

▼雪の中で静寂な時をすごす合掌文化村。左は野外劇場。



つの郷を結ぶ村内の道路や景観にも気を配っている様子が伺える。

カメラ／小林恵 文／浅井登美子



■町並み保存の先進地、いま昔

「馬籠和らかなり」を目標に

保存憲章を制定して20年

長野県 山口村 馬籠宿

江戸時代には旧中山木曾十一宿の一つとして賑わい、明治には文豪島崎藤村を生んだ馬籠宿は、古い街並み保存の先進地として脚光を浴び、年間60万人を越える観光客が訪れる。

戦後いち早く村民の手によって藤村記念館を建設。歴史、文学を生かした町づくりをめざして、昭和47年には「馬籠保存憲章」を制定している。しかし、モータリゼーション化や観光ニーズの変化により、悩みも多い。

村民が協力して藤村記念館建設

山口村（人口2100人）は長野県南部西端に位置し、木曾路の南玄関口に当たる。古くから東西の文化・経済の交差する街道として、関東圏の長野にありながら、中京や関西の影響を強く受け、独自の風土を形成している。明治になって国道（19号）や鉄道の開通などにより、馬籠と隣りの宿場町妻籠（南木曾村）は時代から取り残されることになったが、これがかえって街並み保存につながり、注目されるこ

とになった。

馬籠の観光化の火付け役を果たしたのは島崎藤村である。藤村（本名春樹）は明治5年に4男3女の末子として生まれた。家は代々本陣、庄屋、問屋などを営む家柄。10歳の時長兄に伴われて上京し、東京で大学を卒業したあと、教師をしながら詩、散文、小説を書き始める。馬籠には藤村の長男楠雄が帰ってきて生家の隣りに住を構えるが、藤村も5代に入っしてしばしば馬籠へ戻り、大作『夜明け前』を執筆する。「木曾路はすべて山の中である」で始



藤村記念館の一部。資料展示館は3棟ある。

まる「夜明け前」は、父をモデルに、尾張藩による伐採の不自由さから抜け出せるものと新政府に協力した庄屋の胸から御一新の理想が消えていく日本の夜明け前の苦しみを書いたもので、読む人々に大きな感動を与えた。

そんなことから、藤村が死去（昭和18年8月）すると、その遺髪が馬籠の菩提寺に葬られると共に、戦後を待って馬籠の人々は本陣跡に藤村記念館を建設しようと立ち上った。

設計は東工大谷口博士、木材等の調達から大工、造園まで村民が手分けして行い、夏休みには小中学生も砂利運びを手伝った。

藤村記念館は昭和22年11月15日に完成。藤村の原稿、手紙等から明治・大正時代の貴重な蔵書、雑誌等、莫大な資料が収納・展示されていて、資料館としても最近できたものとは規模が違う。

街並み保存と商売のありようを細かに制定

藤村記念館をみんなの協力で作ったという実績が、その後の宿場町づくりへと受け継がれていったが、この地に注目し愛する多くの文学者との出会いが特色ある観光地に成熟させた、馬籠観光協会長原和英さん（旅館『但馬屋』五代目）は語る。

原さんのお話によると、昭和22年に

京都在住の文学者青野季吉が来村し、「藤村偉なり、恵那山豊なり、而して馬籠和らかなり」と詠んだ。

「この言葉は、ここに生きる人々の目標だと感動し、我々も歴史や文学を勉強しながら良心的に商売していこうと決意しました」と原さんは語る。

昭和47年に「馬籠保存憲章」を制定した。それによると、電柱は表通りから裏側へ移す（中部電力の協力で昭和52年に完成）、改装に際しては古い街並みにマッチしたものに、看板や表札も建物や街と調和するものにする、各戸ごとに花や木を植えて四季折々の季節観を演出する、自動販売機を道路沿いに置かない。さらに土産店等を営むに当たっては、軒先商売をしない、客の引き込みをしない等の客商売のあり方の理念も述べられている。

道路は石畳にし、中央部だけ車椅子等でもラクに通れるようにと特注レンガを敷いている。道路の両端にはわざわざポンプで水を引き、いつも音をたてて小さな小川が流れている。

「保存憲章は法的規制はありませんが郷土馬籠に対する私たちの基本姿勢です。収入の3割は客のサービスの投資しよう、一本木を切ったら二本植えようという心のありようが、この街を魅力的なものにしていくと思っています」

現在は、表札を示す行燈が3種考案

され、夕方になると一斉に明かりをつけて情緒いっぱいになる。通りには梅水仙、つつじ、紫陽花など、いつも季節の花が咲き、馬籠の人々の「和わかさか」が伝わってくるようだ。

観光バスツアーが増えて

しかし最近では観光客の質も変化してきて、ゆっくり宿泊しながら散策を楽しむ人の姿が減った。観光バスでやってくるツアー客は、昼神や下呂温泉に宿泊して馬籠を訪れ、足早に見学して帰っていく。朝10時頃から観光客の姿が増えるが、夕方になるとひっそりとして、土産店も早々と店じまいする。バスや車の駐車場近くでは商売も成立

するが、奥まったところの店は厳しい。従って、軒先商売や客の引き込みもついでにやってみよう。

一方で、中高校や文学青年たちの馬籠ファンは根強く、但馬屋には毎年欠かさずやってくる客が多い。

「古くてどっしりした家に泊って、地酒と手作り料理を味わいながら、ご主人やおばあちゃんと語るのが何よりも楽しい」と、名古屋の出張の後に立ち寄ったサラリーマンもいた。

大抵の土産店が主人は勤め、奥さんが店をやっているが、最近では若い後継者の時代になり、料理や土産品にもさまざまな工夫が見られるようになった。



夏休みは若い女性客も多く、日中は大賑いする。



馬籠では旧盆が忙しいため7月にお盆の行事をする。夜は観光客も少なく、子供達も着飾って夜遅くまで盆踊りを楽しむ。

観光協会青年部の大脇和人さん(32)は、駐車場近くでレストラン&土産店を営む。団体客に対応するため、広々としたレストランでは予約客のスケジュールに合わせて食事を用意、また土産コーナーでは信州の特産品の他に独自

に新しいセンスの和洋菓子等も用意して、多様化するニーズに応えている。「古い街並みを見るだけの観光ではなく、滞在型の観光地としての対応を、妻籠の青年達とも話し合いながら検討しているところだ」と語っていた。

宿場再現に土産店等も自主規制

長野県
南木曾町 妻籠宿



指定されている。出梁造り、格子、卯建等、宿場の構成美は見事で、馬籠のような華やかさはないが、落付いた街並みが人気を得ている。

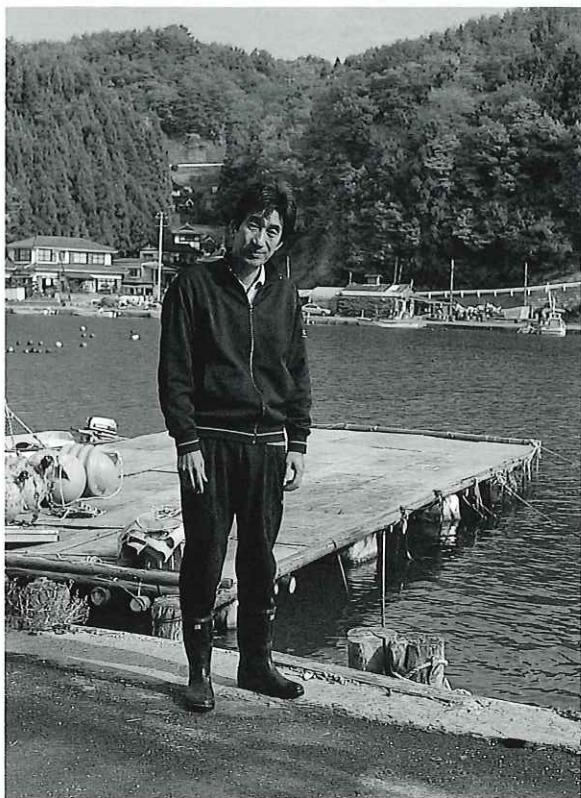
小さな土産店や食事処はあるが、駐車場周辺に多く、古い街並みにマッチするよう自主規制に気を配っている。住民は観光客の来訪に合わせて木戸を開け、土間や縁側を磨き、その奥で日常生活をおくる。山深い木曾の暮らしや風土が凝縮されているような雰囲気の魅力だ。

南木曾町では、妻籠の観光化による村おこしは重視しておらず、林業や農業の育成に力を入れている。山口村と違って広大な面積を持つ町なので、木曾杉や桧を使った伝統産業の職人も多く、最近では森林作業員を都市から招くなど、多角的な村づくりが行われている。

馬籠宿から徒歩約40分のところにある妻籠宿は江戸時代の宿場の街並みをそのまま見事に再現、昭和51年に文化庁より重要伝統的建造物群保存地区に

(写真)小林恵





「牡蠣の森を慕う会」代表の畠山さん。舞根湾の牡蠣養殖場で。

森は海の恋人 海と山の住民が森づくりを通じて交流 唐桑半島「牡蠣の森を慕う会」

「牡蠣^{かき}の森を慕う会」代表の畠山重篤さんは、気仙沼湾唐桑半島に注ぐ恵みの川・大川の源流、室根山に毎年植樹を続けながら室根地区の人々と交流を深め、また、森と川・海が魚や人間の命にとって、いかに大切なものであるかを各地の子供たちに語り、文通をし

ている。これらの活動が評価されて平成6年に朝日森林文化賞を受賞。また、漁師としての暮らしの中で書き綴ってきたエッセイ「森は海の恋人」(北斗出版)も刊行、自然環境問題を訴える活動書を越えた格調高い文学書として注目されている。

植物フランクτονの注ぐ海

風の強い寒い日だったにも拘らず、唐桑半島は波一つ立たない湖のような入江が複雑に続く。紅葉や緑の山をそっくり映して輝くその入江の風景の、何という美しさ、おだやかさ。牡蠣帆立貝、昆布などの筏が並び、その間をぬって漁船がのどかな感じで走っていく。

その半島の一番奥まった入江、舞根湾に畠山重篤さん(51歳)の営む牡蠣養殖場があった。

東京から夜通しクルマで走ってきた、朝気仙沼港で大量に運び込まれたマグロのセリ風景などを見てきたせいもあって、ここはユートピア郷のよう。入江を囲んで点々と家屋敷が建ち、その裏手は森で、紅葉が美しい。ここには、家並みが軒を寄せ合ったり、海風がヒューヒューと吹くような漁村の雰囲気はなく、晩秋のやわらかい陽ざしに満ちあふれている。



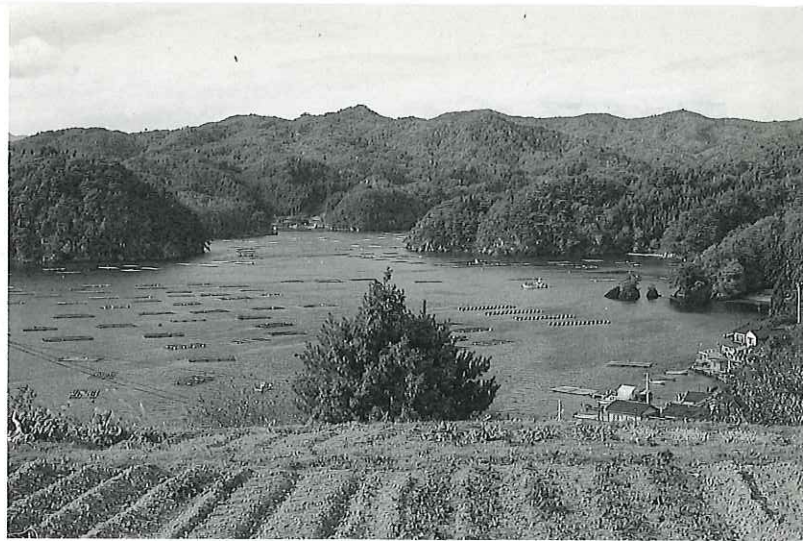
大粒で味がいい生食用の牡蠣

仕事場では、いまが旬の生牡蠣の出荷作業をする女性たちが忙しそうに働いている。

唐桑は、宮城種と呼ばれる大粒で味のいい「真牡蠣^{まがき}」の本場で、畠山さんのところの牡蠣はすべて生食用。東京のフランクトン料理店、デパートなどへおさめている高級牡蠣の養殖場である。

事務所待っていてくれた畠山さんは、開口一番「牡蠣は海水中に漂っている植物フランクトン(餌)を餌に育ちますが、一時間にどれ位の海水を口に入れると思いますか」と質問してきた。

牡蠣は生まれて三週間ほどは海中を漂っているが、300マイクロンほどの大きさになると物に附着しようとす。そのタイミングを見て針金につないだ帆立貝の殻を海に投下すると、翌日にはぎゅっり附着しているのが肉眼でも見えるそう。



▲深い森に抱かれた美しい唐桑半島

牡蠣が餌となる植物プランクトンを摂取するためには大量の水を必要とするだろうから、私が畠山さんの質問に「牛乳1%パックで2、3本分？」と答えると、彼は「1時間に10%、1日一個が200%の水を吸ってはいいてるんです。その牡蠣がここ気仙沼湾だけで5000万個いるんですから、海水が命だということがわかるでしょ」と、子供達に語るように解りやすく説明してくれた。

植物プランクトンを育む養分を大量

に含んだ水は、ブナ等の広葉樹林の腐葉土を通ってきた水に多い。そのため牡蠣の養殖地は、森から流れてきた豊かな川があることが条件になっている。牡蠣の産地で有名な広島は太田川、気仙沼湾の場合は大川。大川は室根山を源にして、その周辺の峰々から流れてきた水を集めて気仙沼湾に注ぐ。水源地域は岩手県室根村となっている。

「昔の漁師たちは森の恵みが海の恵みになることを体験的にも知っていました。ここ舞根は、最も味のよい浅草海苔の種苗付け場で、その頃は沢が深く、川の上流は広葉樹を中心とする600町歩の山があつたんです。

それがいつの間にか各地で開発が進み、広葉樹は杉、松に変つていく。我々漁師も、海で魚や貝が育つのは当り前で、とにかく採っていれば何とかやっていける。森や林があり、そこから流れ出てきた川が、豊かな恵みを与えてくれていることなど、誰もすっかり忘れていたんですね」

生産量が4300万枚という大産地だった気仙沼の乾海苔は、昭和37年をピークに急激に壊滅していった。

気仙沼市の加工場が流す魚の煮汁や相次ぐ埋立、海岸のコンクリート化、年々ひどくなる都市排水。夏になると気仙沼湾には赤潮が発生し、唐桑まで流れてきたという。自然が豊かな気仙沼でさえこうなのだから、全国各地の

漁場はもっと深刻だったに違いない。当時は沿岸で、今まで獲れていた魚が消えたという話をよく聞いたものだ。

一方、山村の方も大きく変わりつつあった。室根では木造船用に高価に売れた松や樺の需要がなくなり、石油、石炭の出現で薪や炭も売れなくなった。国は広葉樹林を針葉樹林化する造林計画を押し進め、その結果、毎年20町歩づつの広葉樹林が伐採されていった。

大川があつて、豊かな海があることを実証

海がおいしい、大川の上流も気になる。そんな思いが日毎に強くなった頃、畠山さんはNHKテレビでシヨッキングな映像を見た。

北海道の日本海側に広がる海。その海底は海藻の全く生えていない死の海で、昆布のジャングルといわれたかつての姿はない。研究者が、鉄分が不足し、海藻や植物プランクトンが成育しないからだ、しかし河川水が流れ込んでいる場所は磯焼けが少なく海藻も生えている。川の源は森、海の生物生産には森林が深く関わっている、と説明している。

畠山さんはNHKに問い合わせ、その研究者、北海道大学水産学部の松永勝彦教授を訪ねた。教授は河川水の大

切さを、科学的にわかりやすく説明してくれた上に、海洋化学の調査班を連れて水質調査に出かけてきてくれた。

一昨年2月のこと。8地点の水を採取し、さらに大川河口や川の調査などを一カ月かけて行った。

この調査や松永教授の話などは『森は海の恋人』に詳しく書かれていて興味深い。ここでは結論だけ言うと、植物プランクトンを育む窒素、リン、ケイ素、フルボ酸鉄の流入量は圧倒的に大川が供給しており、水深20mの深さまで大川の養分が供給されていることがわかったのだ。

それなのに、大川にはいまダムが建設されようとしている。「植物プランクトン? そんなものは黒潮に乗って海が運んでくれるさ」と思っている漁師も多いという。

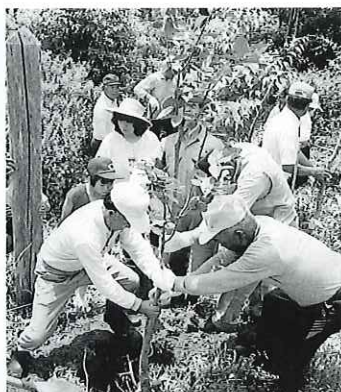
室根村の人々との交流が広がる

大川上流の室根山に木を植えようという畠山さんらの呼びかけに、牡蠣士70名が集った。会の名称は「牡蠣の森を募る会」。

室根村は唐桑からクルマで約30分のところにあり、村の面積の69%が山林。村の北側にそびえる室根山頂(895m)からは宮城県境となる山々が連なり、唐桑湾が眺望できる。8合目には

室根神社があるが、4年に一度の大祭には舞根漁民たちも必ず参列して海水を神前に奉納してきたという親しい間

◆農民と漁師、女性も子供もみんな参加して植樹会



柄でもある。

室根村村長は、山に木を植えたいという漁民の要望に、驚きと戸惑いを感じたようだが、すぐ理解してくれ、神社に程近い見晴し広場という神社林を開放してくれた。

1989年、第一回の植林は、熊野神社になぞらえて熊野水木を数十本。翌年は、船形山のブナを守る会が、ブナの若木を沢山提供してくれた。植林には室根の人々も協力してくれ、さらに会を重ねるに従い、子供達の参加も多くなり、山の子、海の子の交流も盛んになった。夏休みには室根の子供が海へ海水浴にきて、秋になると唐桑の子が山へ行く。

室根村でも漁民の森づくりを契機に、大川を汚さない運動や、伐採されたままの山に広葉樹を植える活動などがはじまり、最近では農業や化学肥料をできるだけ使わないようにしようと、有機農業に切り替える人が増えてきたという。

海の子と山の子の交流は、小学校の体験学習としても取り入れられ、環境教育の絶好のフィールドとなった。この話を聞いて、畠山さんのところには各地の学校から話にきてほしいという依頼がくる。

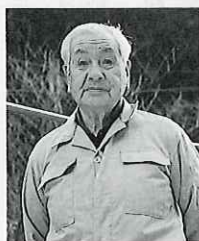
「子供たちこそ未来の担い手。どんなに忙しくても話に行くんです。そのあとで文通したりして、息の長いつき合

いをしていきたいと思います」

畠山さんが講演に行った九州の小学校からは、子供たちの書いた感想文がどっさり送られてきていた。その一つ一つに目を通し、返事を書く畠山さんである。

造林こそが漁民の生活を支える

岩手県重茂半島漁民の「森の生活」



岩手県宮古市周辺の海は、リアス式海岸の複雑な地形と豊かな山林から魚や海藻の育つ

海床が多く、日本を代表する漁業のメッカ。重茂半島は宮古市の東南部にあり、天然ワカメやサケの銘柄漁場でもある。姉吉地区に住む木村安五郎さん(79)は平成2年度朝日森林文化賞「森づくり部門」で優秀賞を受賞した。姉吉部分林組合の組合長で、「豊かな山があるから漁業ができる。海が悪い時は山で働けばいい」と、積極的の山仕事を行ってきた。半島はクヌギ、ミズナラ、ケヤキ、マツ等の広葉樹が茂り、小さな川にはサケもイワナも棲む。漁民たちの住む家は山林や畑のある中腹にあり、林の中にワカメが干してあるというユニークな風景も見られる。

森の民と海の民を結びつけた森づくりは、やがて次世代へと受け継がれ、各地に大きな森と川を蘇らせていくに違いない。

●問い合わせ/水山養殖場 ☎0226-3212174 (浅井登美子)

8年の三陸大津波で50戸の集落があつたという間に波にさらわれ、12戸が現在の中腹に移住した。

「漁業は天候に左右されやすい。漁業と林業の複合経営が必要だと、国有林(半島の大半が国有林)を借り受けて、半島の造林をする山仕事を請負うことにしました。山の木は非常時にどうしても金がいる時以外は伐採しません。山が荒れると漁床も荒れる。ここは岩山だから、木を切るとテッポウ水の恐れもあります。津波の時も森が人家を守ってくれます」

国有林を借りて造林し、「収益を国と造林者たちで分けるという『分取造林』を昭和30年に発足、現在43町歩を管理している。

しかし、木材が安くかなり漁業の方が儲かるようになってから、住民は山に目を向けなくなつた。そのことに気づいた木村さんは、手入れのよい自分の山を見せて、造林の大切さを説いた。国の補助制度を活用すれば、山仕事の手間賃も入ってくる。

いまは年数回、地域住民みんなで参加して山の手入れをする他、山仕事を請負う若手グループもできています。

山形県飯豊町「ヤノハエ工」ツアーに参加した女性たち。炭焼きのあと地元の子供たちと。(95/1/14~16)



農山漁村に残る古い民家や街並み、暮らしや伝統芸能、郷土料理。これらを都市の人々にアピールし、観光客を導入することで、都市と農村の交流を拡大し、地域の活性化をはかる動きが活発になってきている。

しかし都市からやってきた観光客の多くは旅行会社の用意したバスであわただしく見物

気まぐれな都会人の「旅」をどう捉える？

「ふるさと体験ツアー」の試み

●(財)ふるさと情報センター

して帰っていき、マイカーできた家族連れもちょっと食べて土産物を買って通過していく。

農山漁村の自然や伝統文化を理解し、そこで暮らしている人々にふれあう機会として捉えている人々がどれほどいるか、疑問である。

そんな折(財)ふるさと情報センターが、ふるさとの人達とのふれあいや、その土地の文化や自然を大切にす旅「ふるさと体験ツアー」を企画してきた。すでに7年間にわたって実施、今冬(二月)で149回目を迎えている。

都市と農村を結ぶ理想的な「旅」として定着してきたのだろうか。

(財)ふるさと情報センター・西村修一審議役にお話を伺った。

●農山村と都市の情報発信拠点として

(財)ふるさと情報センターは、農山漁村と都市生活者の物と人、心の交流をはかるため、その情報収集・提供窓口として昭和60年に設立された。設立主体は全国の市町村で、現在2165市町村が出資し、農林水産省が後援している。

昨今の「ふるさと産品」人気は、ふるさと情報センターの長年の努力と実績によるところが大きい。

市町村の特産品、交流・体験情報(ふるさと

と会員制度、貸農園、農作業や生活体験、手づくり教室など)、文化・イベント(朝市・祭り・民謡など)、休養(郷土料理・温泉・宿泊施設など)、ふるさと観光などの各種情報収集と、これらを都市生活者に提供するのが主な業務で、情報誌として『ふるさと広場』を月刊で刊行している。

その中でほぼ毎回企画紹介しているのが「ふるさと体験ツアー」で、遠くは沖縄、北海道の三〜四泊の旅、近くは一泊の関東地区の旅。地方に伝わる伝統行事を見学したり、地域の人と交流したり、農産物の収穫体験に参加するなど盛り沢山のスケジュール。宿泊は温泉地にするなど、観光的要素も充分考慮しており、旅行主催は近畿日本ツーリスト東京メディア販売事業本部。

●目下、採算ベースは無視して

この「ふるさと体験ツアー」、都会人に人気を呼び、新しい旅のスタイルとして定着してきているのだろうか。

「旅行の多様化ということもあるが、はっきり言って、都会の不定多数の旅行者は移り気で気ままです。定員はバスの場合45名としていますが、参加者のバラつきは大きく、採算ベースで考えると成立していない場合が多い。受入れる市町村にとっても経済的成果で捉えると、割に合っているとはいえません」

と西村さんは語る。

「普通の物見遊山の観光にあきたらない人

都市から
ふるさとへの
メッセージ



西村 審議役

に、地方の伝統や人々とのふれあい、クラフト体験をベースに企画するツアーで、我々が市町村のニーズに応じて企画・情報提供し、旅行会社が主催するもので、普通の観光と市町村が行う体験・イベント企画の中間のところに位置づけています。参加者には大変好評でファンも多くなりましたが、継続していくためにはいくつかの問題があります。一つは受入れ側が過疎化等を深刻に受けとめて本気でやる気になっていないかということ。宿泊施設があるからとか体験施設を作ったから観光客を呼べるというのではありません。一度行った人がまた行きたくなるためにはもっともっと創意工夫していく必要があります。

もう一つは旅行会社が旅行商品として成立できること。いまのところ残念ながら成功例がありません。宿泊費の一部は旅行会社は何%かをペイしないといけないのですが、受け皿となる公共の宿とか見学施設は安いせいもあり、そのことを考えていない。収入がなくては商売になりませんから、あまり熱心に客集めをしなくなるということになります。

さらに加えて旅行に対する都会人のニーズ。いま『ふるさと体験ツアー』に参加する人の大半は中高年、元氣な女性達です。しかし、我々の場合もそうですが、一度行っ

たところへ翌年もまた引き続き行こうという気にはなかなかありませんから、ツアーを定着させ輪を広げるといふことは意外と難しい。農家や民宿のようなどころへ泊って田舎の生活を味わいたいという人もいますが、全体的には温泉のある設備の完備した宿を望みますから」

一つの成功例として、西村さんは新潟県安塚町の「雪体験ツアー」をあげる。雪を地域資源として捉えて、雪祭りや雪遊びに招く。来村者は、最寄りの直江津駅まで行き、そこへ町からの迎えがきて二泊するという現地集合・解散のかたちを取っている。

●まず周辺都市のニーズを
キャッチすること

西村さんは、都市と農山漁村が交流し、新しい旅のスタイルが定着するために、次のような提案をする。

「いま各地の農村にも立派な施設が出来はじめています。宿泊設備があることが観光客を呼ぶ基本ですから、それはいいのですが、新しいうちは話題性もあって利用者が多いのですが、四、五年経つと倦きられてくる。移り気で気ままで口の肥えた都会人を引き寄せるには、料理やもてなし方にもっと工夫が必要で、地元の田舎料理でいいっても、どこへ行っても同じような山菜料理ではダメですからね。」

ゆっくり滞在してもらおうというのが大切で、農林水産省もグリーンツーリズム運動に力を入れはじめています。ヨーロッパでは一



5月の連休を利用して長野県大鹿村へ「農村歌舞伎見学ツアー」。鹿塩温泉に宿泊、翌日は秘境遠山郷の各地を訪ねる。



「ヤハハエロ」（山形県飯豊町）では、ツアー客は1月15日の夜地元の家々をまわり、郷土料理や芸能をたづぶり味わう。



ふるさと情報や旅行へのニーズは？ 都市生活者調査結果

ふるさと情報センターでは、平成6年2月に都市生活者の「ふるさと情報」に関する調査を行った。それによると、関心度は「温泉・郷土料理・宿泊施設」が75%でトップ、「名勝・景観・自然観察」は40%、「祭り・イベント・朝市」などは39%、「ふるさと体験ツアー」のニーズは28・6%だった。

また一回の旅行では、平均1～2泊、旅行費用は2～4万円が半数を占めている。

図1 1回の旅行での宿泊日数及び旅行費用

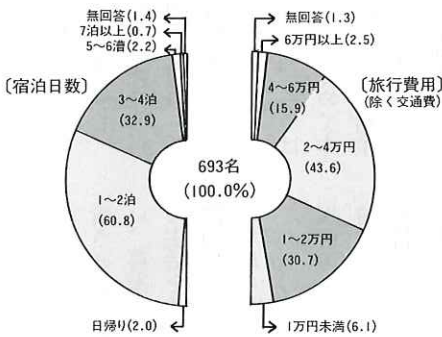


図2 ふるさと情報に対する種類別関心度(複数解答)

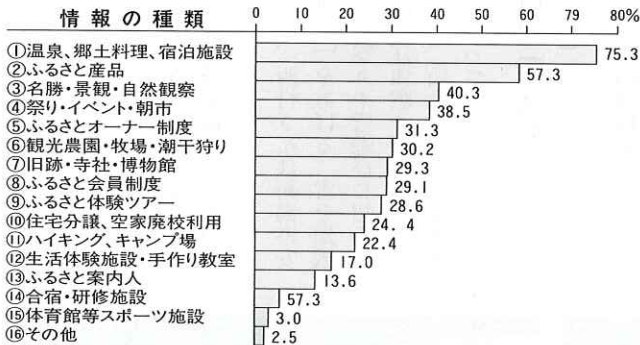


図4 快適に滞在するために宿泊施設が具備すべき最低条件(複数解答)

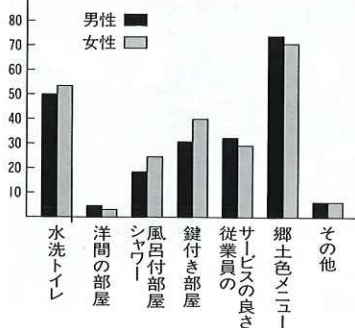
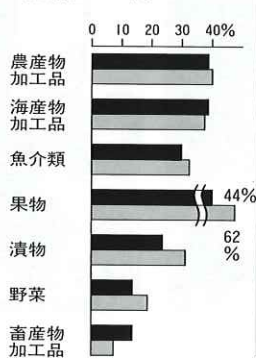


図4 購入したふるさと産品の種類(複数解答)



週間、二週間田舎の農家などに滞在してのんびり休養するというスタイルが定着していますが、日本人の場合はせいぜい三、四日間。しかもマイカーによる旅行が中心だから、夏休みや休日前後に出かけるとなると、行き帰りは道路が渋滞して、何のために快速でリフレッシュな旅をしたのかわからなくなってしまいます」

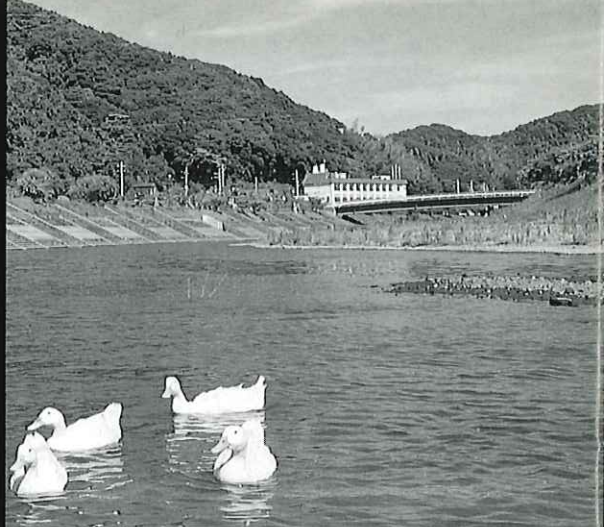
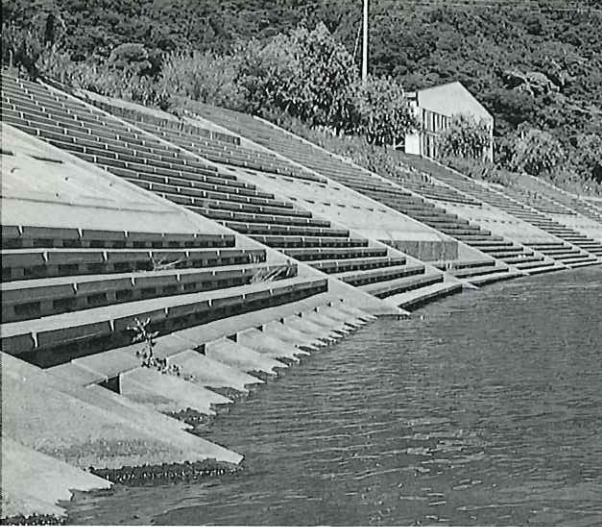
愛知県の足助町が「足助屋敷」や町営ホテル「百年草」などで成功していることについて西村さんは、中京という周辺都市住民が来やすい場所であることも要因の一つで、他市町村が同じように企画しても成功するとは限らないと語る。

「私が受け皿の市町村側に言いたいことは、まず周辺市町村の顧客を大切にすることだと思えます。身近かにあり折にふれて何度も来てくれる、それが大切です。首都圏とか大都会へのアピールはそれからでもいいんです。都会の不特定多数をターゲットにするより、出身者やグループ、団体などに呼びかけ、特色を出していくことだと思えます」

群馬県の川場村と世田谷区、倉沢村と横須賀市のような友好都市交流もあるが、継続していくうちに、せつかく米村しても区や市の作った施設を利用するだけになり、都市と農村の交流という本来の姿を守り続けるのは本当にむずかしい。

「グリーンツーリズムが日本で定着するにはまだまだ時間がかかるでしょう。一般に、旅行は非日常の体験といいますが、私は日常性の延長上のものがグリーンツーリズムだと思っています。暮らし、生き方そのものを見直していく必要がありそうです」と西村さんは語っていた。

●(財)ふるさと情報センター
 本部/千代田区平河町2-1-7-1 塩崎ビル
 ☎03(3261)4081
 大阪センター/☎06(204)0776



環境保全へ向けて

「産廃物処分をめぐる問題」

近年、産業廃棄物の処理をめぐる問題が各地で多発している。処分場建設にはつきものの住民の反対運動。不法投棄や、未処分の廃棄物がせつかくの美しい自然環境を悪化している例も数多く、被害を直接被るのは河川や原野等を多く持つ農村村ということになる。

産業廃棄物処理をめぐる問題を解決

するには、抜本的な法改正が必要で、平

成3年には「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」が20年ぶりに全面的に改正された。最終処分する前のいろいろな前処理を義務づけ、排出から最終処分まで管理する管理票(マニフェスト)制度の導入、罰則の強化等である。

しかし全国には産廃関連業者は7万2000社あるといわれ、その2割はダミー会社といわれる。産廃処理促進法や行政指導の網をくぐりぬげながら不法投棄する悪質業者も多く、ある業者は「産廃物を出さない社会を作らない限り不法投棄は減らない」と言い切る。

「公的買い上げ」で決着したが……
葛生町処分場問題

その行方が全国的に注目された栃木県葛生町の産廃処分場反対運動は、5年間も続けてきたが、公社が土地を買い上げるといふ措置で、住民側の主張がほぼ通るかたちで決着した。

葛生町仙波地区。ここには7社の石灰石採掘工場があり、今まで木村石灰工業等により石灰石の野天掘りが行われてきた。直径90m、深さ40m、面積2万3000㎡、埋め立て容量は74万6000㎡で東京ドームの約2倍に相当する。木村石灰工業は採掘してきた穴を今後は産廃物で埋め立てる計画を立て、子会社の関東美環を設立。ここに産廃プラスチックやゴムくずなど水に溶けにくい「安全5品目」を埋める予定で、栃木県も許可した。

大穴の底には高さ15mのコンクリート塔を設置し、湧き出る地下水を取水して近くを流れる出流川に流す施設を作ったが、問題はこの水を寺尾地区集落が井戸水や簡易水道水として使っていることだった。

住民たちは92年夏「栃木の水と緑を守る市民の会」を結成、1100人の

会員が体を張っても阻止するという強い連帯で反対運動を行い、操業差し止め訴訟を宇都宮地裁に起こした(92年11月)。会員は93年4月から県庁に行き知事との面会を要求したが知事は会おうとせず、住民の反対闘争が激化した。

寺尾地区住民があくまで反対するのはもう一つ、60年前の出流川流域のチフス発生も要因となっている。チフスで住民10人が死亡している。従って「安全5品目」といっても、安全の証明はなく、産廃処理業者に対する不信は強い。

一方、県側は「処分場は必要で、申請が現行の法律に合致している以上許可しない訳にはいかない」と10項目の行政指導を付して操業を許可した。

鉱業法によれば、鉱区を設定し採掘権を取得すると、永久権として産廃の利用も産廃権者にゆだねられるという。

県と反対住民の間に入ったのが県議会と栃木市議会の有力議員たちで、昨年3月、休戦、調停へとこぎつけた。

調停案の主な内容は、①栃木市土地開発公社が処分場を買い上げる(約10億円) ②跡地利用は3年をめどに市、公社、地元住民で協議して決める ③住民側は、操業差し止めなどを求めた仮処分申請を取り下げる、というもの。

跡地は住民の過半数以上の同意がないと決定できないため、処分場としての

利用は事実上不可能になった。

葛生町の紛争解決策は全国的にも大きな波紋を投げかけた。処分場をめぐる反対闘争を行っていた住民たちはこの政治的解決を高く評価しているが全国産廃物連合会は「処分場の建設がますます難しくなる」と言い、厚生省も「廃棄物は日々排出されるので不法投

「ゴミをリサイクルして有効利用」

厄介者のゴミをリサイクルして有効利用できないだろうか、という研究開発が各地ではじまっている。自治体と企業が協力してスタートしたりサイクル活動は、地域住民のゴミ分別や軽減化を促進し、環境保全への関心も高まっている。

可燃ゴミが固形燃料に変身して
温泉オープン (栃木県野木町)

昨年5月にオープンした「ゆーらん」はクアハウスを想わせる温泉施設。670㎡の建物内には露天風呂、湯湯打たせ湯、サウナ、休憩室などがあり、(財)野木町施設振興事業団が運営に当たっている。

温泉はボイラーで加熱利用しているが、この熱源は、隣接する資源化センターで生産されたゴミの固形燃料。発

棄の引き金になる」と憂慮している。

同省のまとめによれば、全国の産廃物処分の埋め立て残余年数は平均1.7年。しかし一般ゴミ処分には積極的な自治体も産廃物には住民の反対運動に押されて消極的だ。全国ではいま50カ所以上が産廃物処分問題でゆれ動いている。



▲健康センター「ゆーらん」

熱量は45000〜50000キカロロリでほぼ木炭並み。固形燃料は燃えても灰にせず炭となる装置を使っているため、ゴミが固形燃料になり、さらに炭になって水質浄化などに再利用できるという。

野木町では小山広域保健衛生組合に収集を委託し、ゴミを生ゴミとその他

の物に各家庭で分別、生ゴミは指定袋に入れて分別してゴミステーションに出す。

固形燃料になるゴミは、紙くず、プラスチック、革製品、食品トレイなど。これをセンターに回収してホッパーに投げ入れ、破袋機で選別。二回に分けて細かく破碎して、水分が10%以下になるまで乾燥。その後風力を利用して不純物を取り去り可燃物だけを選出して形成器で棒状に加工。これが固定燃料である。

一方、生ゴミは水をよく切るために新聞紙に包み、指定の紙袋に入れて出す。センターでは金属探知機で生ゴミ以外のものを除き、水分60%以下に乾燥、調整処理しながら、発酵菌を加えて65度で3時間加熱する。それを熟成槽に入れて一カ月寝かし、さらに二カ月熟成させて、最後に陶器や金属塵を取り除くと堆肥が完成する。

野木町の人口は約2万3000人で一年間に出る可燃ゴミは約4200t。これが見事に変身して固形燃料が1800t、堆肥が500t生産されるようになった。堆肥は無料で住民に配布、固定燃料はこれまで製紙・セメント会社に燃料として販売してきたが「ゆーらん」の開設で、一日600kgを消費することになった。

ゴミの分別方法や指定袋の購入で、当初は住民の反発もあったが、結果的



▲資源化センター建物の一部

にはゴミの8%の減少化に加えて、温泉ができた堆肥を無料でもらえるなど、住民も「ゴミはお宝」という意識を持つようになっていく。

なお、資源化センターの建物や緑地は町が管理するが、センター内の機械や施設管理には(株)日本リサイクルマネジメント(本社04921340113)が当たり、「ゆーらん」も三セクで運営するなど、民間運営型の新しいスタイルとしても注目されている。「ゆーらん」は毎日午前10時〜午後8時まで開館。入浴料は町民大人300円、町民以外は500円となっている。

●野木町役場 ☎02801574111

ゴミ焼却灰をタイルに
コストも市販品並みで――

(西濃環境整備組合)

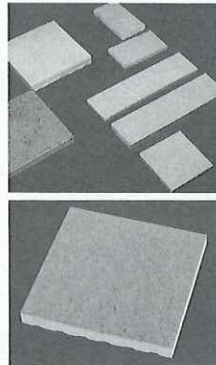
岐阜県大垣市、安八郡、揖斐郡、本
巣郡の20市町村で構成される西濃環境
整備組合(岐阜県大野町)では、瑞浪



▲西濃環境型整備組合内にオープンした温水プール。使われているタイルはすべて「灰テクタイル」

市の窯業技術研究所、タイルメーカー
と共同研究で、ゴミ焼却灰とキラ(粘
土精製時の残渣)を利用した陶器質タ
イルの開発に成功、大量生産へ向けて
準備が整った。

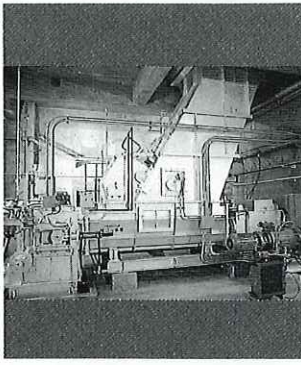
西濃地区では25万人から出る可燃ゴ
ミの焼却(年間5万トン)で5000



▲完成したタイルのいろ
いろ



▲磁選機(砂と不燃物を分ける)



▲給じん装置
(ゴミを破袋して焼却炉へ)

トンの灰が発生する。この灰を埋立処
分するためには用地の確保と諸経費が
年々大きくなり、集塵灰は埋立作業も
面倒である。

一方、東濃地方は地場産業である窯
業の原料を精製する際に産業廃棄物で
あるキラが大量に発生し、その処理に
苦慮してきた。

この二つの厄介者をリサイクルして
有効利用をはかりたいと、同組合と窯
業技術研究所(株)丸新による共同研
究が平成2年にスタート。その結果、
原料の品質管理、前処理、混合、焼成
温度等の適正化で、灰とキラを45%ま
で混入してもJIS規格の安全基準を
十分に満たすタイルが開発できた。

昨年11月開設の温水プールの床タイ
ルにはこのリサイクルタイルが使用さ
れた。薄茶色の柔らかい自然色で、ゴ
ミ焼却による完全余熱利用のリサイク
ル・プールとして好評を博している。

今まで溶融スラグ化した灰の利用は
他地区でも行われているが、市販品よ
りコスト高のため商品化に至らなかつ
た。今回開発した西濃タイルは一枚
105～110円で、市販品と変わらず、
既存の製造設備で出来ることも注目
されている。色見本も増やしていく予
定で、現在タイルの注文を受け付けて
いる。(2万枚・500㎡以上から)

●西濃環境整備組合

☎0585-3512545

無公害・良質のブロックに
廃棄物固化プラント建設

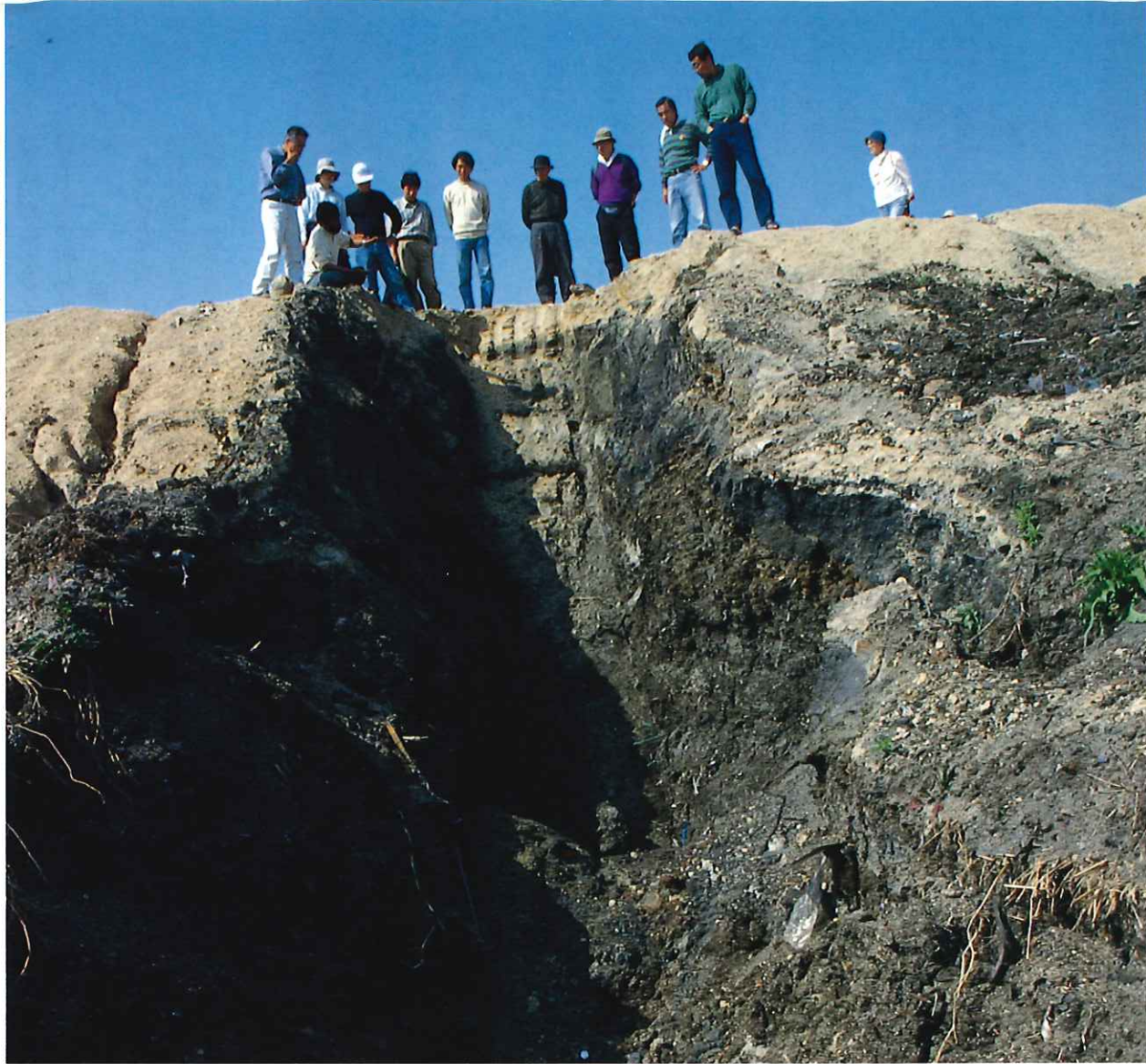
(香川県津田町)

香川県津田町(人口9000人)で
は岡山県の化学会社との研究開発で、
焼却灰をブロックなどの二次製品に加
工するプラントを建設、二次製品は公
共土木工事などに利用されている。

異物を取り除いて粉砕した焼却灰に
セメント、硬化剤を混ぜて化学処理す
るもので、焼却灰は分解され無害化す
る。酸やアルカリ、紫外線、温度に影
響されることもなく耐水性に富んでい
る上に、加工性が高く、簡単にプロッ
クやレンガ、瓦、平板、U字溝などに
加工が可能だという。瀬戸内海でも屈
指の白砂青松を有する津田町ではこの
二次製品を利用してさらに自然保護に
役立てたいと張切っている。●津田町
保健衛生課☎0879-4213101

(長野県伊那市)

伊那市(6万1000人)では、各家
庭や病院等から出た廃油を2カ月に一
度市内約30カ所の回収ポイントに持参
してもらい、回収した廃油は農事組合
の有機肥料工場へ運ぶ。し尿処理場か
ら出る脱水汚泥から有機肥料を製造す
る際に添加し、肥料の熟成を早め、悪
臭軽減に役立てている。市民団体の石
けん造りにも活用。●伊那市生活環境
課☎0265-784111



▲表面の覆土の下には黒々とした廃棄物が層を成している。近くの島の自然保護グループが廃棄物を視察、ショックを受けた。

豊かな島を返して!

産廃物不法投棄と闘う豊島てしま(香川県土庄町)

写真・文
小林 恵

「郷里はどちら」と聞かれると、「瀬戸内海の小豆島の隣りの、豊かな島と書いて豊島という島です」と自慢げに話す。島には電気があったが私の住む集落にはなく、ランプのホヤを磨くのが子供の仕事だったこと、テレビの「月光仮面」を見るために20分歩いて小学校へ行ったことなども私は自慢げに話してきた。

島で暮らしたのは12歳までだったが、貴重な体験や思い出は、いまでも鮮明に心のアルバムにしまわれている。

その豊島と再会し、関るようになったのはテレビで産業廃棄物投棄事件で悩む豊島が映し出されたことだった。

水晶を採りにいった山が削られ、アサリを獲った浜は埋められ、釣りをした磯にはゴミがあふれていた。折をみて島へ行くと、かつての友人が産廃物対策の中心になって頑張っていた。以来、仕事の合間をぬって島通いが続いている。

豊

島は瀬戸内海の東部、小豆島の西方に壇山(339m)がそびえ、周辺海岸や丘陵地に6集落があり、現在638世帯、1547人が暮らしている。古くから稲作が盛んだったことから豊かな島、豊島と呼ばれた。やわらかくて加工しやすい豊島石による石材加工業や農水産物の供給地として生活も成り立ってきたが、「ゴミの島」として有名になってからは、豊島産そう麺やみかん箱からブランド名が消えた。

また豊島は賀川豊彦ゆかりの地で、乳児院老人ホーム、精薄者更生施設があり、「福祉の



▲自動車関係の産廃物に混って生活廃棄物も見られる表面。

▲ラガーロープの残骸。廃棄物の上に乗せて焼くと白い煙が出るので、黒煙のカモフラージュに役立った。



▲豊島住民は昨年1年間、交代で毎日香川県庁前へきてゴミ撤去を県民や行政に訴えた。



▲採石場跡に160種のチューリップを植え、住民に無料配布している三好由一さん。左は会の代表・山本彰治さん。

（ほぼ島の全住民）の反対署名を持って抗議にいったのがこのはじまりだった。

しかし、有害ゴミは無害ゴミだ、ミミズ養殖地だとすり変えられ、産廃物を満載したダンプが次々と上陸、島は砂塵と産廃物を野焼きする黒煙で汚染され、ゼンソクを訴える人が増えた（1名ゼンソクで死亡）。

住民が「島の環境悪化と住民の健康を損なう」と訴えたのに対し、県は「個人の生存権は認めるべきだ」とし、さらに産廃物については「金属回収業（有価物）」と回答、この不

島」とも言われている。私の両親もそこで働いており、ゴミ問題を除けば、私にとってもこよりも安らぎを感じさせてくれる場所であることに変わりはない。

そんな島に降って湧いたのがリゾート開発という名の産業廃棄物。島の西海岸の景勝地を所有する豊島総合観光開発（株）が、昭和50年12月に産廃物処理許可申請を県に提出。それを知った住民は翌年2月に1425名

法投棄を10年間も許可した。

結局、平成2年11月に兵庫県警が豊島総合開発を産廃物処理法違反容疑で摘発、香川県もそれを認めて、松浦庄助氏ら処理業者は逮捕（のちに50万円で保釈）されたが、島には大量の産廃物が残った。

長 らく封鎖し住民の立入りを禁止してあった産廃物処理場にも一昨年からようやく一般の人が入れるようになった。

国立公園特別地域という自慢の景勝地は、山林が切られ岩肌をむき出しにし、見渡す限りがゴミの丘陵地に変身している。海岸に近い人目にふれる場所には土砂を覆土してあるが、その下には黒々とした土やシュレッターダスト、製紙汚泥などが層をなし、水たまりの水はメタンガスを発生して真黒だ。産廃物に混って、ビニールやプラスチックなどの生活廃棄物らしいものも混在している。

これまでにニッケル汚泥ドラム缶など約



▲住民会議の代表の一人、石井亨さんは地鶏を飼ったり花卉を手がけて、島で農業で生きる道を模索。会の文書作りを一手に受けている。



▲住民会議の代表、安岐正三さんは高級ハマチを養殖。ここ数年漁師としての仕事はサツパリだが、法律にはかなり強くなった。



▲船(土庄港～豊島家浦港～宇野港)からは廃棄物処理地がよく見える。樹木がはぎ取られた景勝地は痛々しい。

1400本、廃油約200本が撤去されたが、製紙汚泥約1万トン、シユレッダダスト約14万トンなど95%の廃棄物は放置されたままだ。県では海への汚染を防ぐためコンクリート壁を設けたが、現場からは規準を大幅に上回るPCBや鉛、ヒ素が検出されており、有害物は確実に土壌や地下水に浸透している。「廃棄物対策豊島住民会議」の代表の一人、安岐正三さん(42歳・漁業)は「我々が当初から抗議を行ってきたのに、県が許可し違反行為を黙認したことがこんな結果になった。私たちは県の責任において全面撤去するよう要求していますが、県は『撤去は困難。法的責任はない』と繰り返し返すばかりです」

しかし一昨年、中坊公平弁護士(元日弁連会長、公害問題の第一人者)が弁護を引き受けてくれたから、ようやく明るいいきざしが生まれ、昨年3月には高松市で国の公害等調査委員による第一回公害調停へとこぎつけた。

島民も結束、昨年は毎日5、6人が交代で高松市の県庁前に出かけ抗議の坐り込みを続けてきた。

昨年末には2億円余の調査予算が計上され、総理府の3カ月に渡る大がかりな現地調査も始まった。住民たちは「これからも長い闘いの日々は続くだろうが一步前進だ」と明るさをとり戻している。

小さな島の大きな傷跡。これは単に豊島だけの問題ではなく、いつも都市や現代の産業社会の犠牲になってきた農山漁村の縮図でもある。自然を愛しながら、自然を壊し人心を荒廃させる現代社会、現代人とは何なんだろうと考えさせられる日々である。

各地の〔茅葺の里〕



福島県舘岩村
「前沢曲家集落」
福島県最南端に位置し1500m級の山々に囲まれた高原の村。前沢集落は明治40年に大火に見舞われたが、それを機に棟梁の手で計画的な集落づくりが行われ、統一的な景観を誇っている。平成5年に曲家資料館、土蔵、水車等の「前沢ふると公園」を開設。舘岩村役場観光課 ☎0241-78-3330

茅葺の民家は日本の代表的な建物だが、昨今はほとんど見られなくなってきた。歴史的価値の高いこれらの建物や民具を保存し、伝統文化や生活様式を継承しようという施設や集落が各地に誕生している。

代表的な茅葺の里を紹介する。他に資料館、郷土館等として茅葺の家を保存、活用しているところも多いが、スペースの関係で省略する。

岩手県遠野市「伝承園」

民俗学者・柳田国男の「遠野物語」で有名で、古民家・南部曲がり家の集落が点在している。伝承園は「旧菊地家」の南部曲がり家（国指定重要文化財）をはじめ、おしらすまで有名な御蚕神堂、工芸館などがあり、伝承行事、昔ばなしの語り会、民芸品製作等の行事がある。

「伝承園」 ☎0198-62-8655

福島県下郷町「大内宿」

南会津の東端にあるいで湯の町で、大内宿は江戸時代の宿場町の面影を現在でも色濃く残しており、国選定重要伝統的建物保存地区。中心部にある「町並み展示館」は本陣跡に宿駅時代の本陣を復元したもので、生活用具等が1300点展示してある。

下郷町役場企画観光課 ☎0241-67-2111

栃木県栗山村「平家の里」

秘境・湯西川に逃れた平家の落人たちの伝説の地で、山里で暮らしてきた人々の民俗・伝統、山仕事の技術などを後世に継承する拠点として移築再現した。茅葺の展示館、郷土文化伝承館、民芸加工所など9棟の茅葺がある。湯西川温泉郷としても知られるいで湯の里でもある。平家の里 ☎0288-98-0126

千葉県栄町「房総のむら」

利根川の流れと北総台地の自然に恵まれた栄町には数多くの古墳がある。「房総のむら」は県立体験博物館として房総に残る茅葺民家等を移築、再現したもので、広大な雑木林の中に江戸後期から明治時代の建物、農家3棟、武家屋敷1棟、商家16棟がある。房総地方の伝統的な生活様式や技術を実物や実演で再現。入館者が農作業や手工芸を体験できるよう年間300コースを設けている（予約制）。千葉県立房総のむら ☎0476-95-3333

金沢市「江戸村」

江戸時代の建物、民具、歴史的資料などを展示。敷地内には人馬、継立間屋（国指定重要文化財）をはじめ、農家、大商家など20数棟ある。隣接する「檀風苑」には製作用具の展示館や民家群

があり体験教室も。（株）百万石文化園 江戸村 ☎0762-35-1721

奈良県曾爾村「絆の里」

曾爾川流域に開けた自然景観のすぐれた歴史の古い村。「絆の里」には茅葺屋根木造合掌造りの会館があり、郷土資料、民具等を展示すると共に、特産品や民芸品も販売している。絆の里会館 ☎07459-4-2244

神戸市茅葺民家群の保護

六甲山系の北側、神戸市北区、西区には江戸時代から続く茅葺の家が多いが、開発に伴いここ20年間で760戸が消えた。しかし現存する茅葺は北区に945戸、西区に191戸あり、大都市近郊にこれだけの数が残されているのは全国でも珍しい。なかでも箱木家は室町時代の建物で日本最古の民家。そのため94年度より市では景観形成重要建築物指定にし、住民の同意を得て必要な改築を助成していくことになった。市の公共施設に転用した民家もある。神戸市役所 ☎078-331-8181

愛媛県久万町「ふるさと旅行村」

久万高原の一角に、町内に残る古い茅葺民家、水車小屋を移築、さらに国民宿舎、休憩所、ケビン、キャンプ場、星を観察する「星天城」を設けるなどして観光客が散策しながら多目的に楽しめるよう工夫している。 ☎0892-41-0711

熊本県泉村「五家荘」

九州山脈の山里にある平家落人伝説の里で、五つの集落を総称した名前。「五家荘平家の里」には茅葺き民家を代表する緒方家をはじめ、資料館、能舞台、特産品販売所などがある。緒方家は平家の子孫・緒方紀四郎盛行の屋敷で200年ほど前に建造されたもの。村で修復し公開している。泉村役場振興課 ☎0965-67-2111

編集室から

▼関東大震災以来と云われる阪神大震災は、多くの命を奪い、多くの人々の心と身体に大きな爪跡を残しました。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

▼手間がかかる、お金がかかる、自由でなくなる——古い建物や町並み、景観を保存するのは大変なことですが、しかし、いまなんとかしなきゃ。大震災では仕方ないが、中小地震、風水害、特に火災に気がついて、これらの貴重な遺産を子孫に残す義務があるのではないのでしょうか。

過疎地域活性化ビデオ 第2弾

―都市との交流・体験参加型―
本号を手にする頃にはタイトルも決まっている筈と思いますが、新潟県高柳町、高知県構原町、群馬県川場村の活躍を紹介しています。第一弾同様、各地のCATVでご覧になれる日も近いですよ。
●前号39頁兵庫県の西陣は「西脇」の誤りでした。お詫びします。

De POLA [でぽら]

No.8 ('95春夏号)

発行日/平成7年3月15日

発行所/全国過疎地域活性化連盟

〒105 東京都港区虎ノ門1-1-24

オカモトヤビル8階 ☎03(3580)3070(代)

編集協力・印刷/株ぎようせい

■協力/(財)地域活性化センター

(財)ふるさと情報センター

男のロマンか、女の夢か。



(本誌は、財団法人日本宝くじ協会の助成を受けて作成したものです。)



男性64%、女性47%。これは宝くじの購入経験者の割合です。

そして、特に目につくのが女性購入者の伸び率。

宝くじは男女平等。ロマンも夢も男女平等。

当たった喜びは、どなたと分けますか。



財団法人 日本宝くじ協会